四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概要15

岡山南・中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

―― 四條畷市岡山・中野所在 ――

1984・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概要15

岡山南・中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

―― 四條畷市岡山・中野所在 ――

1984・3

四條畷市教育委員会

はしがき

昭和58年度国庫補助事業による緊急発掘調査は、それぞれ岡山南遺跡・中野遺跡の範囲内に属する地点の調査であった。

国鉄忍ケ丘駅の東南部一帯の遺跡を岡山南遺跡とよんでいるが、今回の調査はこの遺跡の東端に位置する地点で、調査結果は古墳時代後期の大溝ならびに中世（室町期）の掘立柱の建物跡の一部を検出することができた。

また、中野遺跡は、かつて国道163号線沿線の四條畷市水道局の南側道路に、大阪ガスが天然ガス管埋設工事に伴って調査を行った際、命名された遺跡で、この遺跡からは、古墳時代の集落跡とともに多量の製塩土器があり、注目された遺跡であった。今回の調査は、前回の調査地点より約20米南にあたる地点の調査で、調査の結果、この地点からは遺構の検出はなかったが、古墳時代後期ならびに中世（室町期）の遺物が検出された。

今回の2遺跡の調査は、今までの調査結果の上にさらに当地域の状況を明らかにする上で大きな収穫のあった調査となった。

調査にあたっては、府教委をはじめ関係各位のご指導をいただき、地元においては、松井　茂・南畑芳雄・高木正太郎・中田勝三の各氏におしみないご協力をいただいた。こゝに深甚なる謝意を表する次第である。

四條畷市教育委員会

教育長　櫻　井　敬　夫

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和58年度国庫補助金事業（総額2,000,000円、補助率――国庫50％、府費25％）の交付を受けて担当実施した四條畷市岡山所在岡山南遺跡と、中野所在中野遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。

2．調査は、昭和58年6月15日に着手し昭和59年3月31日まで調査及び整理作業を行った。

3．発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課技師・野島　稔を担当者とし、補助員として、前田　暢、川本　英、林　清文、東　憲治、石川　淳、石原宏二、陰田範男、近藤克祥、田川貴司、遠山育洋、東村博生、福西啓二があたった。

　出土遺物の整理・実測などについては、野島、前田、川本、林、川本三智子、秋山敬子、上野和歌子、泉　節子、中川ひさえ、南野智子、西尾牧子、岡田桂子、白石由香があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔、前田　暢が行った。

5．発掘調査の進行・報告書作成などについては、同志社大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・井藤　徹・堀江門也、高槻市教育委員会・橋本久和、東大阪市教育委員会・勝田邦夫、寝屋川市教育委員会・塩山則之、(財)枚方市文化財研究調査会・宇治田和生・三宅俊隆・桑原武志、オレゴン大学・片岡　修、(財)元興寺文化財研究所・西山要一、畷古文化研究保存会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。又、清滝共同墓地から出土した土器・鉄器を寄贈していただいた南畑芳雄氏には明記して厚く感謝の意を表したい。

6．発掘調査の進行については、土地所有者・松井　茂、高木正太郎、中田勝三各氏には終始懇切なご協力をうけることができた。又調査作業については、森建設株式会社、中田工務店、奥野重機の全面的な協力を得た。

本　文　目　次

はしがき

例　　言

岡山南遺跡（第７次調査）

Ⅰ．調査に至る経過……　1　頁

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境……　6　頁

Ⅲ．調査概要報告……　9　頁

　Ａ．層　　序……　9　頁

　Ｂ．遺　　構……　9　頁

　　ａ．落ち込み状遺構……　9　頁

　　ｂ．掘立柱建物跡……　12　頁

　　ｃ．大　　溝……　13　頁

Ⅳ．出土遺物……　14　頁

Ⅴ．まとめ……　22　頁

中野遺跡（第６次調査）

Ⅰ．はじめに……　25　頁

Ⅱ．調査概要報告……　26　頁

Ⅲ．出土遺物……　28　頁

Ⅳ．おわりに……　30　頁

挿　入　目　次

第１図　岡山南遺跡調査地位置図
第２図　岡山南・中野遺跡周辺地形遺跡分布図
第３図　岡山南遺跡遺構配置図
第４図　岡山南遺跡遺物出土状況平面図
第５図　岡山南遺跡遺物実測図・Ⅰ
第６図　岡山南遺跡遺物瓦実測図・Ⅱ
第７図　岡山南遺跡遺物実測図・Ⅲ
第８図　清滝共同墓地内遺物実測図・Ⅰ
第９図　中野遺跡調査地位置図
第10図　中野遺跡トレンチ断面実測図
第11図　中野遺跡遺物実測図・Ⅰ

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　岡山南遺跡遠景
図版３　岡山南遺跡近景
図版４　岡山南遺跡遺構全景
図版５　岡山南遺跡落ち込み状遺構全景
図版６　岡山南遺跡掘立柱建物跡全景
図版７　岡山南遺跡落ち込み状遺構内遺物出土状況・Ⅰ
図版８　岡山南遺跡落ち込み状遺構内遺物出土状況・Ⅱ
図版９　岡山南遺跡落ち込み状遺構及び大溝内遺物出土状況・Ⅲ
図版10　岡山南遺跡大溝内遺物出土状況・Ⅳ
図版11　遺物写真・Ⅰ
図版12　遺物写真・Ⅱ
図版13　遺物写真・Ⅲ
図版14　遺物写真・Ⅳ
図版15　遺物写真・Ⅴ
図版16　清滝共同墓地全景及び遺物写真・Ⅵ
図版17　遺物写真・Ⅶ
図版18　中野遺跡近景
図版19　中野遺跡第１トレンチ・第２トレンチ調査
図版20　中野遺跡調査地スナップ及び第２トレンチ断面
図版21　中野遺跡第１トレンチ断面及び遺物写真・Ⅰ

岡山南遺跡（第７次調査）

Ⅰ．調査に至る経過

岡山南遺跡は、忍ケ丘駅東約100ｍの府道枚方・富田林・泉佐野線を中心とする約400ｍの範囲を周知の遺跡として大阪府文化財分布地図に示されている。この地域は、忍ケ岡丘陵と呼ばれる東西に舌状に張り出す丘陵であるため南北方向の範囲はほぼ正確に把握できているが東西については東側は既成集落が建ち並ぶ地域であることから明らかでなかった。

まず最初に過去の６次にわたる調査成果を簡単に報告しておきたい。

昭和50年に府道新設バイパス工事現場をパトロール中にＡ地点から古墳時代中期の土器片を採集したことによって発見された遺跡であり、文化財保護法に基づきすみやかに関係諸機関に連絡を行い、再三の協議の結果、同年10月から11月にかけて遺跡の範囲及び遺構の保存状態を正確に把握するために大阪府枚方土木事務所から依頼を受けて第１次発掘調査を実施した。その結果、府道建設予定地の全域の市道蔀屋清滝線と市道忍ケ丘駅前線の間約400ｍ の範囲に古墳時代から江戸時代に至る複合遺跡であることが確認された。

この第１次発掘調査に基づき道路予定地内の全面発掘調査に切り替えて翌年３月から４月にかけて第２次発掘調査としてＢ地点の調査を行った。

第２次発掘調査で得られた成果として、北河内で初めて古墳時代中期の住居跡が発見された。住居跡の規模及び平面プランは、約８ｍ内外と推定される竪穴住居跡で方形プランを呈している。この住居跡は尾根の南端で道路予定地中央より西側の一画で検出したもので道路西側の民有地まで広がる範囲であった。

竪穴住居跡の北側には掘立柱建物跡も検出している。建物跡の中には１間×２間の倉庫跡も検出したことは北河内地方における古墳時代中期～後期にかけての集落を考える上で重要な資料を提供してくれた。

次にＣ地点の北側尾根を昭和51年７月から10月にかけて第３次発掘調査として実施した。調査地は旧畑地として昭和50年頃まで開墾されていたため床土下部まで一部掘り下げられていた。第Ⅲ層の褐色砂質土を除去・削平を行った後に近世の溜池状遺構と東西南北に交叉する溝を検出した。検出された溝は東西に５条、南北に５条がそれぞれ確認した。

溜池状遺構と溝とは切り合い関係はなく、溜池状遺構の東に検出した南北方向に走る溝は調査地全域の約30ｍの長さが確認した。この溜池からこの東側の溝に水を供給する事によって全域の溝内に流れる仕組みになっている。

溜池状遺構及び溝との検出面において鎌倉時代末頃の建物跡が検出している。この柱穴(Pit)内には根石が置かれているものや、建物を放棄した段階で土師質小皿及び瓦器椀を埋めていることが確認されている。その他の出土遺物としては皇朝十二銭の乾元大宝(958年)の銅銭が4点出土したのをはじめ、瓦質羽釜、塼がそれぞれ出土した。瓦器編年からみて13世紀頃のものであった。

これらの建物跡に混って土壙も1基検出している。土壙の規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ40cmの偏楕円形で、内から土師器甕、高杯、片口大鉢、須恵器杯等が出ており、又同じ頃の井戸跡を調査地区南端で検出している。直径1.5m、底部内径0.8m、深さ1.2mの円形素掘り井戸であった。井戸内堆積の黄褐色砂質土層中から土師器、須恵器の破片が出ており、又、最下層から須恵器細頸壺1点が出ている。時期的にみても6世紀のものであった。この井戸と切り合い関係がある大溝Aは調査地区南端に蛇行しながら検出した。

大溝A内上面において中世の日常雑器類が出土しており、井戸との切り合い関係から井戸築造以前に大溝Aが掘られたことは事実であったが、中世以上の土器は全く含まれていなかったが、後にも説明するが、第6次調査区のF地点の発掘調査において大溝A最下層から縄文時代晩期の土器片が出土し、同一層から石鏃、石錐がそれぞれ出土している。

大溝Aの北側に全長約50m、幅2～3.5m、深さ1～1.2mのU字状をした溝が調査地区中央に逆S字形を呈して検出した。この溝を大溝Bと呼び、溝内から古墳時代中期の家形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪や土師器小形丸底土器、甕、長頸壺、手捏ね土器等の土器に混り木製下駄、叩き板が出土している。

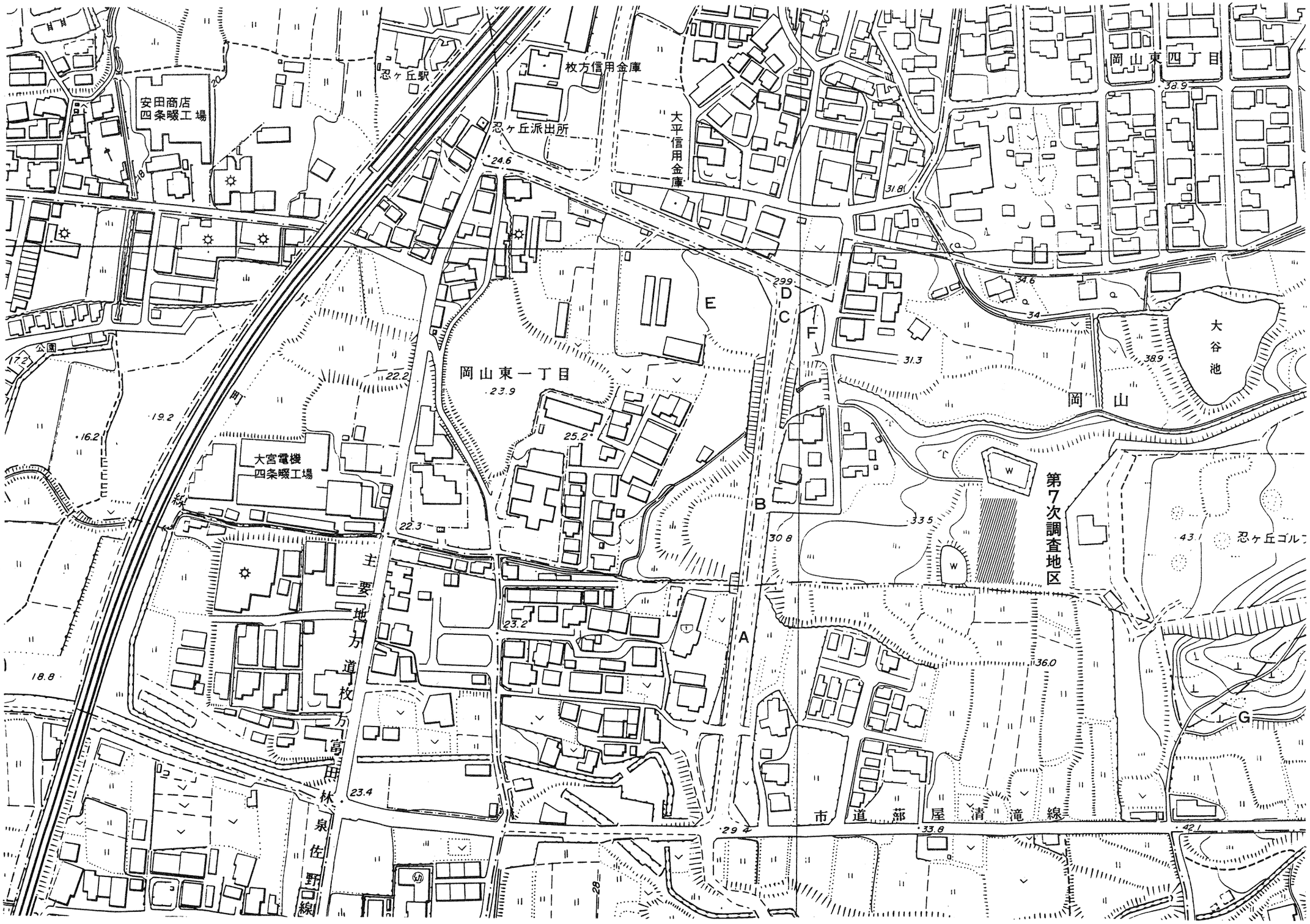
この大溝は古墳時代中期頃に掘られ後期にまで使用されていたことが出土した土器で明らかになったが、遺構の性格については今後とも研究する課題である。溝内水流系路は地形及び溝底高からみて東から蛇行しながら先端西側に流れていたものである。しかし上記にのべた土器及び埴輪類は全くローリングを受けておらず、又、小形丸底土器についてみると故意に土器を並べた状況で検出した。

溝内から円筒及び形象埴輪が数多く出土しているが墳墓とは全く考えられない。

その後第4次発掘調査地区としてD地点を調査した結果、大溝Bの北端に続く部分と第6次発掘調査地区F地点の大溝B東端に続く部分をそれぞれ発掘調査しているがC地点で検出した大溝Bと規模及び出土遺物は全く変わることはなかった。

第4次及び第6次の発掘調査の間に昭和56年2月から4月にかけてE地点の全面発掘調査を第5次として実施した。

その結果、大溝BはこのE地点には全く検出されておらず、検出した古墳時代中期の遺構はすべて掘立柱建物跡のみであった。現在大溝Bより東側周辺は既成集落のため不明であるが大溝B周辺で検出した遺構からみて、西側一帯に住居跡が検出したことから住居と墓地との区画とも考えられる。このことについては今回の調査地区や清滝共同墓地G地点



第1図　岡山南遺跡調査地位置図

から古墳時代中期の須恵器・鉄刀・鉄斧が一括で採集されている。又、正法寺跡から2基の古墳が正法寺造営によって破壊されたことが発掘調査によって確認されている。

今回の第7次調査は、忍ケ丘ゴルフセンターの駐車場に忍ケ丘ハイツ建設計画がなされたもので、岡山南遺跡と清滝古墳群のほぼ中間に位置していることから遺跡の存在が予想されていた。

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

岡山南遺跡は大阪府四條畷市大字岡山に所在する。四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県との県境になる。南北に通じる東高野街道沿いには、中世の掘立柱建物跡・井戸等の遺構が存在し、陸路交通の要地であり、中世村落として栄えていた。このような地理的に重要な位置を占めていたことは、原始・古代においても同様、文化的先進地域の様相を呈し、多くの遺跡の存在が知られている。

当遺跡は生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の海抜25～30mの忍ケ岡丘陵の地形を利用して立地している。東の生駒山系から流れる水は讃良川・清滝川・権現川となり、いずれも丘陵を横切りつつ東西に谷地形を形成している。

今回の調査地は忍ケ岡丘陵のほぼ上位に発見された。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、この枚方台地は大きく北から枚方市船橋川・穂谷川・交野市天野川・寝屋川市寝屋川・四條畷市讃良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地には原始・古代の幾多の遺跡の存在が知られている。

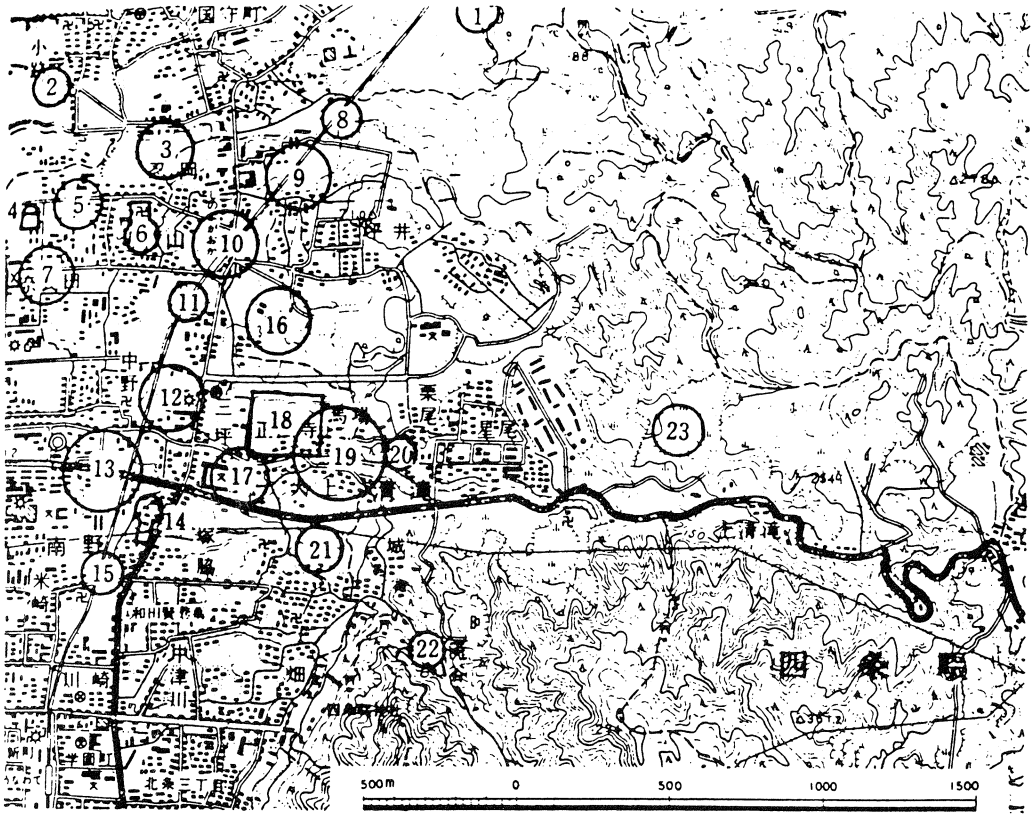
最近になって旧石器時代の遺物を発掘調査によって明らかになってきた。枚方台地の旧石器時代遺跡としては、現在のところ20遺跡が知られており、特に国府期のナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している枚方市楠葉東遺跡、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した津田三ツ池遺跡、細石器・石核が出土した藤阪宮山遺跡、国府型ナイフ形石器・石核が出土した交野市神宮寺遺跡、ナイフ形石器・細石器・削器・彫器・礫器等を出土した四條畷市更良岡山遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡が知られている。他に表面採集された寝屋川市打上、四條畷市忍岡古墳附近においてもナイフ形石器が採集されており、旧石器文化研究上枚方台地はきわめて重要な位置をしめている。

縄文時代には米粒文、山形文を施した押型文土器を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡、四條畷市田原遺跡、東大阪市神並遺跡において近畿地方で最古の土器が出土している。又、枚方市穂谷遺跡、大東市寺川堂山にも早期の土器が発見されている。

前期には石器のみ採集された津田三ツ池遺跡が知られる。

中期には渦巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、交野市星田旭遺跡があり、後期・晩期にはほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶等多量の土器・石器が出土する四條畷市更良岡山遺跡、岡山南遺跡・清滝古墳群においても石鏃、深鉢形土器が出土する。

枚方市交北城ノ山遺跡において滋賀里式系の深鉢形土器を転用した埋甕遺構が発見されている。



第２図　岡山南・中野遺跡周辺地形遺跡分布図

1．打上遺跡	8．国守遺跡	16．**岡山南遺跡**
2．小路遺跡	9．坪井遺跡	17．四條畷小学校内遺跡
3．更良岡山遺跡・讃良寺跡 更良岡山古墳群	10．忍ヶ丘駅前遺跡	18．正法寺跡
	11．南山下遺跡	19．清滝古墳群
4．四條畷市銅鐸出土地	12．奈良井遺跡	20．国中遺跡
5．北口遺跡	13．**中野遺跡**	21．木間遺跡
6．忍岡古墳	14．墓の堂古墳	22．龍尾寺跡
7．奈良田遺跡	15．南野遺跡	23．千畳敷遺跡

弥生時代については四條畷市雁屋遺跡から畿内第Ⅰ様式中段階の高さ70cmの大壺が出土しており、古代河内湾の時代で最北端で発見され、北河内で最初の遺跡と知られている。また四條畷市田原遺跡において前期末の壺が出土している。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や第Ⅱ様式～第Ⅳ様式に認められる直径11.5mの巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ口山遺跡、交北城の山遺跡で第Ⅱ様式から始まる方形周溝墓42基・竪穴式住居跡８棟・土壙・高床式建物跡が検

出された場所は穂谷川水系沿いに立地している。

後期の第Ⅴ様式になると枚方市・交野市・寝屋川市の淀川左岸地域においては数多く点在する。代表的なものとしては、小型仿製鏡や分銅形土製品が出土した鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居跡が発見された山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した藤田山遺跡、住居と墓地をⅤ字溝によって分離した星ケ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鏃を含む53個の鉄器片が出土した星ケ丘遺跡等があげられる。

古墳時代について見ると、眼下に淀川を見下ろす水運との関係を考えなければならない万年寺山古墳から8面の銅鏡が出土している。又、直径25mの円墳と考えられ画文帯環状乳神獣鏡1面・銅鏃6本・鏃形石製品2個他を出土した藤田山古墳、粘土槨内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄剣・刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約80mの前方後円墳で後円部に長さ約6.3m、幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる忍岡古墳がある。

交野市の森古墳群から前方後円墳と円墳を含む8基の前期古墳群が確認されており、眼下に巴形銅器・筒形銅器を出土た交野車塚古墳、中期になると枚方市禁野車塚古墳、牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると生駒山系西麓に数多く分布しており、特に大東市堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・更良岡山古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市中宮古墳群・臼雉塚・比丘尼塚・北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋川市寝屋古墳、終末期には国史跡指定されている石ノ宝殿古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡の発見は、四條畷市が大半を占めている。四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に5個の竪魚木をつけたものや、円筒埴輪・蓋形埴輪・動物形埴輪とともに木製下駄も出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塩土器や最古形式の須恵器とともに勾玉・臼玉・紡錘車・木製剣が多量の土器とともに出土している。隣接地の奈良井遺跡には実際に製塩作業を行った石敷製塩炉及び1辺約40mの方形周溝遺構の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品がそれぞれ一括で出土している。又、同一溝内から小型の蒙古系馬が埋葬されていた。古代から中世にかけての遺跡は各市において数多く知られている。

Ⅲ　調査概要報告

今回の第７次調査地点は、四條畷市岡山108－1で、忍ケ丘ゴルフセンター内の忍ケ丘ハイツ建設予定地内の一画である。当地点は、生駒山系の西側斜面から派生する忍ケ岡丘陵の南側傾斜部に位置している。

調査は、昭和58年６月15日に忍ケ丘ハイツ建設予定地内に南から５ｍ×４ｍ，４ｍ×４ｍ，４×４ｍのトレンチ（試掘穴）３ヶ所を設定して遺構の有無及び保存状態と基本的な層序の確認を行なった。

試掘調査の結果、忍ケ丘ハイツ建設予定地内南端の南北９ｍ、東西11ｍの範囲にだけ遺構及び遺物が検出した。

Ａ．層　　序

調査地の西壁断面の基本層序は、第Ⅰ層（盛土）、第Ⅱ層（旧表土）、第Ⅲ層黄褐色粘質土となる。各層は東から西へ、北から南へと少し傾斜している。遺構のベース面の第Ⅲ層下においては全く傾斜面をもたないフラット面に検出している。

第Ⅰ層　盛土、忍ケ丘ゴルフセンター建設時に山土（黄褐色粘土）を削平して盛土とした。

第Ⅱ層　昭和40年代まで荒地となっていた。

第Ⅲ層　厚さ約20～30cmで全域に認められる。

第Ⅳ層　厚さ約30cmの黄褐色粘質土で遺構のベース面を構成している。黄褐色粘質土は西側半分だけに検出した遺構ベース面であり、東側半分の遺構ベース面は黄褐色礫混り粘土層からなっている。

以上の層位の中で第Ⅲ層内から磁器及び平瓦片が少量であるが出土している。

Ｂ．遺　　構

今回の調査で検出した主な遺構には、落ち込み状遺構・掘立柱建物跡・大溝の各遺構である。このうち落ち込み状遺構と掘立柱建物跡の遺構が地山面である黄褐色粘質土層から掘り込まれており、両遺構からの出土遺物を比較検討した結果時期差は全く認められなかったことから共存していた可能性がある。

しかし、Pit No.8とPit No.9との切り合い関係からみて約⅓世紀位いの時期差も考えられる。

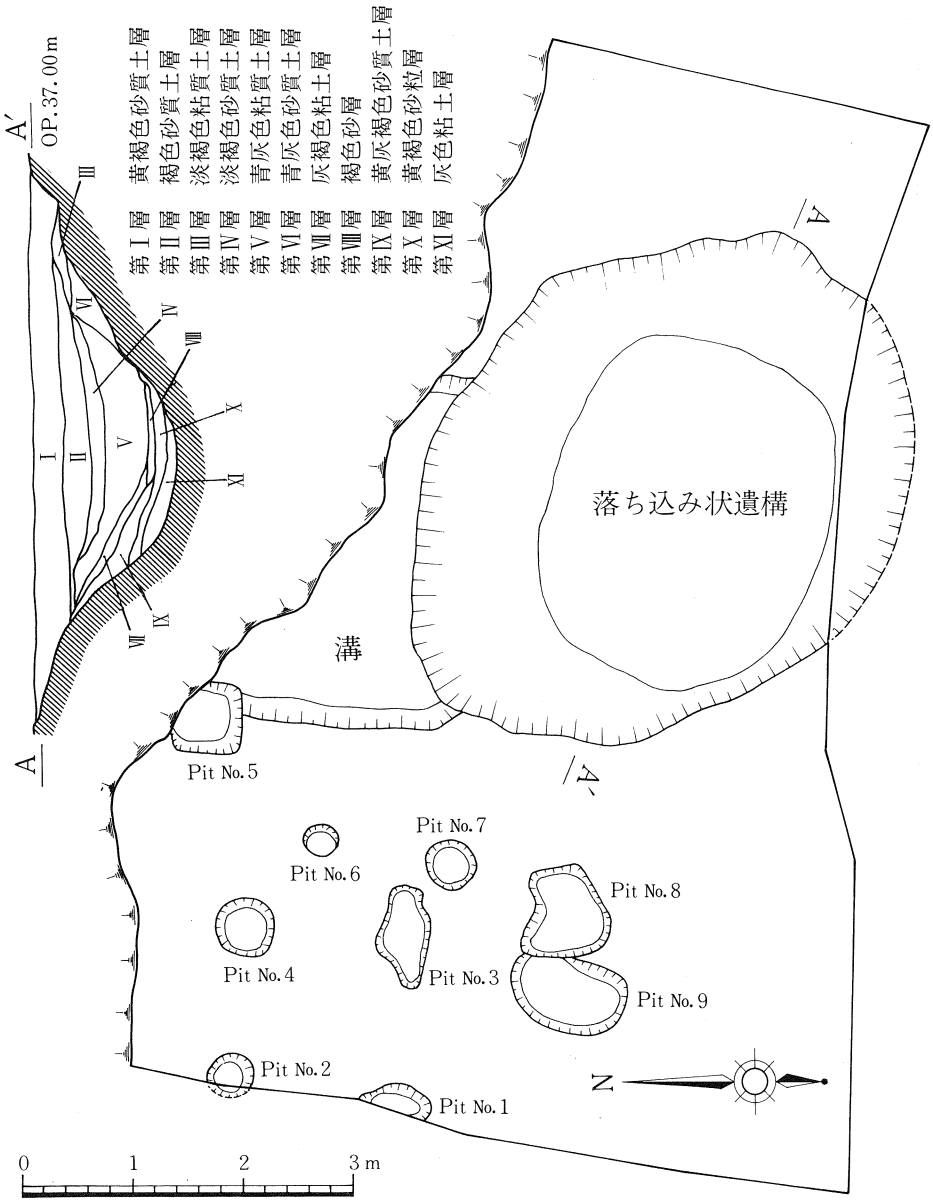
a. 落ち込み状遺構（第３～４図・図版４～５）

調査地区の南東部分に落ち込み状遺構が１基検出された。遺構の直径は、東西 4.3ｍ、南北推定で約4.3ｍを測る。底は平底に近い不整形な円形状を呈している。落ち込み状遺構の肩部は標高Ｏ．Ｐ．37.20ｍで反対に最下層の地山面は標高35.90ｍで深さ1.3ｍを測る。

遺構内の堆積土層は、第Ⅰ層黄褐色砂質土、第Ⅱ層褐色砂質土、第Ⅲ層淡褐色粘質土、

第Ⅳ層淡褐色砂質土、第Ⅴ層青灰色粘質土、第Ⅵ層青灰色砂質土、第Ⅶ層灰褐色粘土、第Ⅷ層褐色砂層、第Ⅸ層黄灰褐色砂質土、第Ⅹ層黄褐色砂粒、第Ⅺ層灰色粘土がそれぞれ堆積している。遺構の肩部及び底部に20～60㎝大の生駒山系から産出する花崗岩の石が検出されている。全体的にみてこの花崗岩の石は、遺構の肩部に現位置を保っているものが多く認められているが底部に転落している花崗岩は北側肩部から落ちたものか、もしくは南側肩部からの転落石とみられる。

次に遺構内の遺物出土状況であるが、第Ⅰ層の東側肩部に瓦質羽釜（第5図－8～10)、瓦

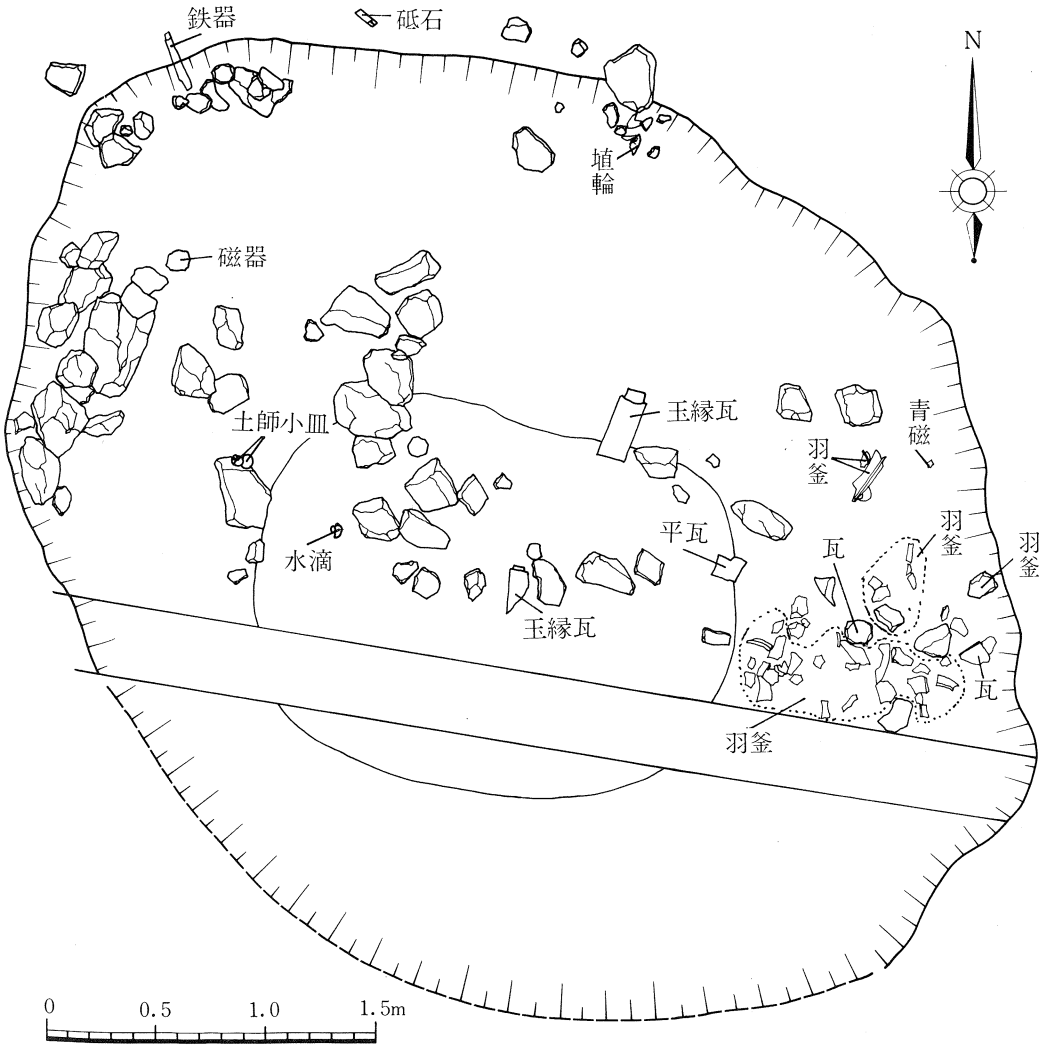


第3図　岡山南遺跡遺構配置図

質香炉(第５図－７)、土師質小皿(第５図－１～４)、瀬戸焼灰釉平碗(第５図－６)、瓦(第６図－11～14)、熙寧元寶(図版11－11)〈1068～1077年北宋銭〉が15cm内外の11個の花崗岩の間から出土している。特に瓦質羽釜は約１ｍの範囲内に４器種が一括で出土したもので、この東肩部以外の場所からは全く羽釜片は出土しない。第Ⅱ層の褐色砂質土から平瓦だけが出土している。第Ⅳ層淡褐色砂質土からの出土遺物は玉縁瓦（第６図－11・図版８上，11）の瓦が南北方向に正位の状態で出土している。

第Ⅴ層の青灰色粘質土は、この遺構内で最も堆積土が厚く約40cmを測る。

第Ⅴ層上面において瀬戸焼水滴（第５図－５）が口を南側に向けて横位の状態で出土している。同じ層内から龍泉窯系青磁碗（図版13）や須恵質練鉢（図版13）・平瓦（第６図・図版13）がそれぞれ出土している。特に瀬戸焼水滴は口径2.2cm、器高3.3cmの小壺に肩部



第４図　岡山南遺跡遺物出土状況平面図

に注口部を付けた水滴である。これと同形式のものが高槻市岡本山古墓から出土している。最下層の灰色粘土から花崗岩の石の間から玉縁瓦（第6図－12・図版8）が出土している。最下層から出土した玉縁瓦と一緒に出た花崗岩は先にのべた南北いずれかからの転落石かと思われていたが、この石には火を受けた形跡があり、一部に赤褐色を呈しているものや、一部にススが付着していることが認められ、最下層以外の石には全く火による痕跡は認められない。このことからも、この落ち込み状遺構内に玉縁瓦及び花崗岩の焼け石を最初に投げ込まれている。

多数の石が転落しているのは、O.P.36mライン、すなわち第Ⅴ層青灰色粘質土が堆積する前である。この時期でほぼ底部は完全に堆積したと考えられ、この第Ⅴ層上面の水滴出土層の上面においては北側肩部から10～30㎝位の石が8個前後転落したことが層位によって明らかである。

b. 掘立柱建物跡

調査地区の西半面に集中して検出された柱穴（Pit）は合計9ケ所を数える。建物跡での高さは、O.P.37.0mである。Pitの径は30～80㎝で深さは15～30㎝である。

Pit No.1は調査地区の西端に検出したもので直径60㎝、深さ20㎝を測る。Pit内堆積土の褐色砂質土層内から練鉢が出ている。

Pit No.2はPit No.1の北側の1.6mのところに直径40㎝、深さ15㎝を測る。Pit内堆積土の褐色砂質土層から須恵器片が出ている。

Pit No.3はPit No.1の東側1.4mのところに直径90㎝×50㎝、深さ25㎝を測る。Pit内堆積土の褐色砂質土層から須恵器・土師器・磁器片が出土している。

Pit No.4はPit No.2の東側1.4mのところに直径50㎝、深さ32㎝を測る。Pit内からの出土遺物は見い出せなかった。

以上のPit No.1～Pit No.4の4つのPit間の距離は東西間が1.4m、南北間が1.6mを測ることができた。Pit No.3及びPit No.4より東側に続くPitの検出はなかったが、Pit No.1とPit No.2より西側は開発外のため調査は出来なかったが、続く可能性があり、推定建物間数は1間×2間の建物と推定される。

Pit No.5は1辺65㎝、深さ10㎝を測る。Pit内堆積土の淡褐色砂質土層から須恵器・土師器・瓦器埦・瓦質土器がそれぞれ出土している。このPitは古墳時代の大溝西側肩部を切ってつくられており、これと関係するPitは今回の調査地区内に検出されておらず、北側の後世の攪乱によって削り取られた可能性がある。

Pit No.6はPit No.3、Pit No.4の中間の東側に直径30㎝、深さ20㎝で検出されたPitの中で最小である。Pit内堆積土の淡褐色砂質土層から土師器片が出土している。

Pit No.7はPit No.6の南1.2mに直径45㎝、深さ20㎝を測る。Pit内堆積土の淡褐色砂質土層から瓦器埦が出土している。

Pit No.8はPit No.9の切り合い関係からPit No.9の後にPit No.8が掘られたものであるが、このPit No.8には以前にPitが掘られていたところへ新たに掘られたものでPit No.8はそのために変形したPitである。すなわちPit No.6、Pit No.7に続く位置にPit No.8内の東側が一列に1.2m間隔にあり南北方向に2間分が検出している。Pit No.8の規模は直径80×70cm、深さ10cmを測る。

Pit No.9は100cm×70cmで深さ15cmを測る。Pit内堆積土の淡褐色砂質土層から須恵器、瓦器埦がそれぞれ出土する。

c. 大　溝

昭和58年6月15日第1トレンチとして試掘調査を設定した場所が大溝の北側に見られる攪乱された場所であった。

試掘調査の際、溝の一部を確認し、溝内の堆積土である褐色砂質土層内から須恵器甕・須恵器坏身・坏蓋・高坏・土師器・円筒埴輪等が出土した。その後、本格調査に引り替えて実施した結果は第3図に見られる遺構が検出したものであった。遺構の規模は東西の肩幅3.3m、底面で2.8m、深さ25cmで大溝の西側肩部は海抜T. P. 37.11m である。

試掘調査で出土した土器類の他には、有蓋高坏（第7図—20)、直口壺（第7図—17~18)、台付壺〈脚部〉(第7図—19)、砥石（第7図—27)、鉈（図版15—49）が認められた。

大溝内から出土する土器・鉄製品、石製品類は構内西側に集中して出土したもので、円筒埴輪片も同様西側に集中している。

大溝の北側については先述した後世の攪乱によって破壊されており、又、南側については落ち込み状遺構の掘られた時期に破壊されたものである。落ち込み状遺構によって破壊された大溝については、落ち込み状遺構の東・西方向に溝が続かなく、やはり、直線状況に南の谷間の方へ流れていたと推定されている。

Ⅳ　出土遺物

概　観

落ち込み状遺構・掘立柱建物跡・大溝遺構に伴って出土した遺物は、土器・瓦・銭・埴輪・鉄製品・石製品からなる。土器は、古墳時代と鎌倉時代～室町時代の土器類が出土していた。大半の土器は落ち込み状遺構と大溝遺構からの一括資料で遺物は比較的短期間のうちに堆積したと考える。ここに実測図可能なものだけを報告しておきたい。さらに昭和55年12月19日に四條畷市清滝在住の南畑芳雄氏から今回の調査地から南東約 150mの清滝共同墓地から出土した土器及び鉄器を寄贈していただいた一括資料を大溝内の鉄製品との参考資料としてここに出土遺物実測図第８図として合わせて報告しておきたい。

《落ち込み状遺構出土遺物》

土師質小皿（第５図－１～４・図版７・図版11－１～４）

口径７cm内外の小皿で底部の形が波をうったものである。しかし、この種の他に各遺跡から尖がり気味のものや平底のものが多く出土していることから大別して３種類に分けることができる。

(1)は口径6.6cm、器高1.4cmの浅い皿で底部は歪で波をうっている。底部と体部との境が不明瞭で、体部は内弯ぎみに立ち上がり口縁端部は丸くとじる。外面の体部と内面全体にナデ調整が施されている。

(2)は口径7.8cm、器高2.1cmのごくゆるく波をうった底部で体部は外反ぎみに肥厚し、口縁端部で丸くとじる。丁寧な整形の後、底部内面を一方向にナデたのち外面の体部中位より上と内面体部をナデ調整を施す。

(3)は口径6.5cm、器高1.4cmの尖がり気味とも思わせる底部で器壁が厚く、ゆるやかなカーブでたち、体部は内弯ぎみに延びて口縁端部で丸くとじる。体部内外面に時計回りのナデ調整を施す。

(4)は口径7.1cm、器高1.5cmの底部中央が肥厚して波をうった底部で、ゆるやかなカーブでたち体部は直線的に口縁端部で丸くとじる。内面の体部中位より上と外面の体部に時計回りのナデ調整を施す。

水　滴（第５図－５・図版７・図版11－５）

口径2.2cm、器高3.3cm、注口内径0.3cmを測る広口のやや扁平な胴部をもった小壺に、肩部に小さい注口部をつけた水滴である。胎土には細砂粒を含んだ良好な粘土を用いており、底には糸切り痕が明瞭に残っている。肩部の注口と反対面に把手が付けられている。水滴上部⅔位まで灰釉が認められる。内部底部に注口部から棒状のものをさし込まれた際に付けた刺突痕が認められる。

灰釉平碗（第５図－６）

底径6.2cm、残存高5.0cmで内・外面に灰釉を施した大形の碗で、黄白色のやや粗い粘土で早い轆轤で一気に挽き上げており、やや酸化気味の焼成で黄緑色を呈している。

瓦質香炉（第５図－７・図版13－７）

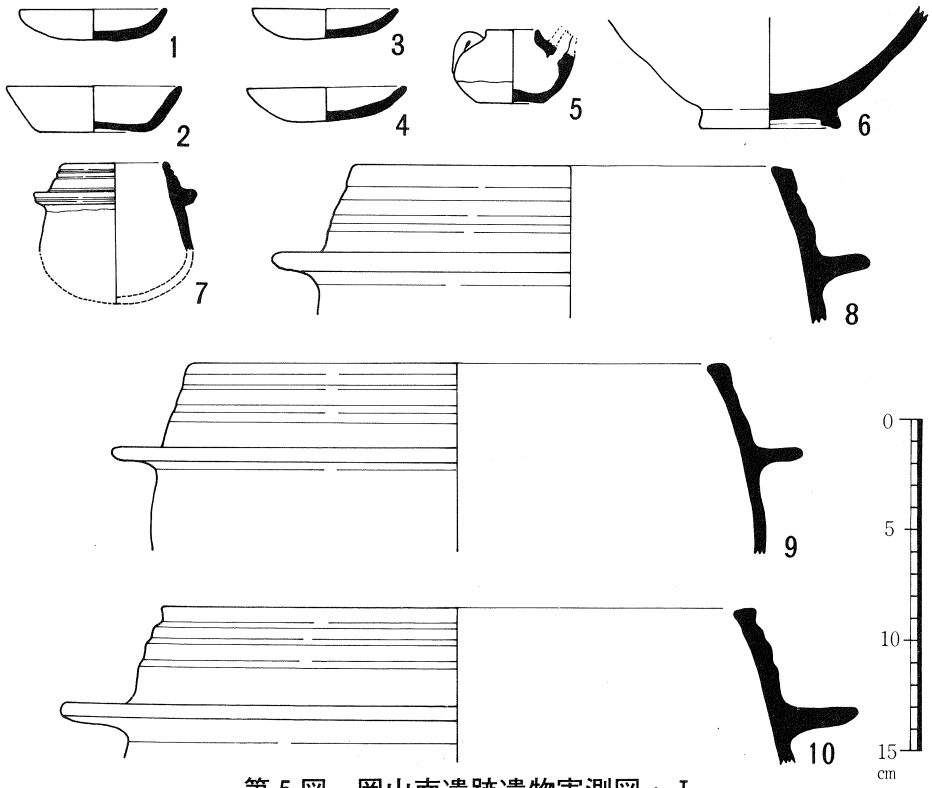
口径4.5cm、残存高4.0cmで口縁部は体部との境に弱い稜をもって内弯し、口縁端部を丸くとじる。断面台形のつばをもち２条のヘラ描き沈線をもつ。内側はロクロによるナデ調整で、外面口縁部はヘラミガキ、つば部はロクロナデを施している。底部欠失のため三脚の貼り付け痕は認められなかった。色調は灰色で外面つば下面より下にススの一部が付着している。

羽　釜（第５図－８～10・図版９・図版12－８～10）

鍔付のもの多数が出土している。ここに実測図可能な３点だけを報告しておきたい。淡褐色を呈し土師質土器の系統に入るものと、暗灰色を呈した瓦質土器の系統に入るものが出土している。いずれもススの付着が認められる。内面は刷毛による調整痕をよく残している。

(8)は口径23.0cm、つば径27.0cm、残存高7.0cmで内弯する口縁部は端部に平面をもつ。つばは断面が台形で短く上向きに付く。内外面ともにナデ調整が施されている。口縁端部及びつば下体部にススが多く付着している。

(9)は口径24.2cm、つば径31.5cm、残存高8.5cmで、直線的に長い口頸部は内傾し段をもち、



第５図　岡山南遺跡遺物実測図・Ⅰ

端部は内へ肥厚する。つば部はしだいに薄くなり端部は丸い。外面はナデ調整を施し、内面は刷毛整形を行う。

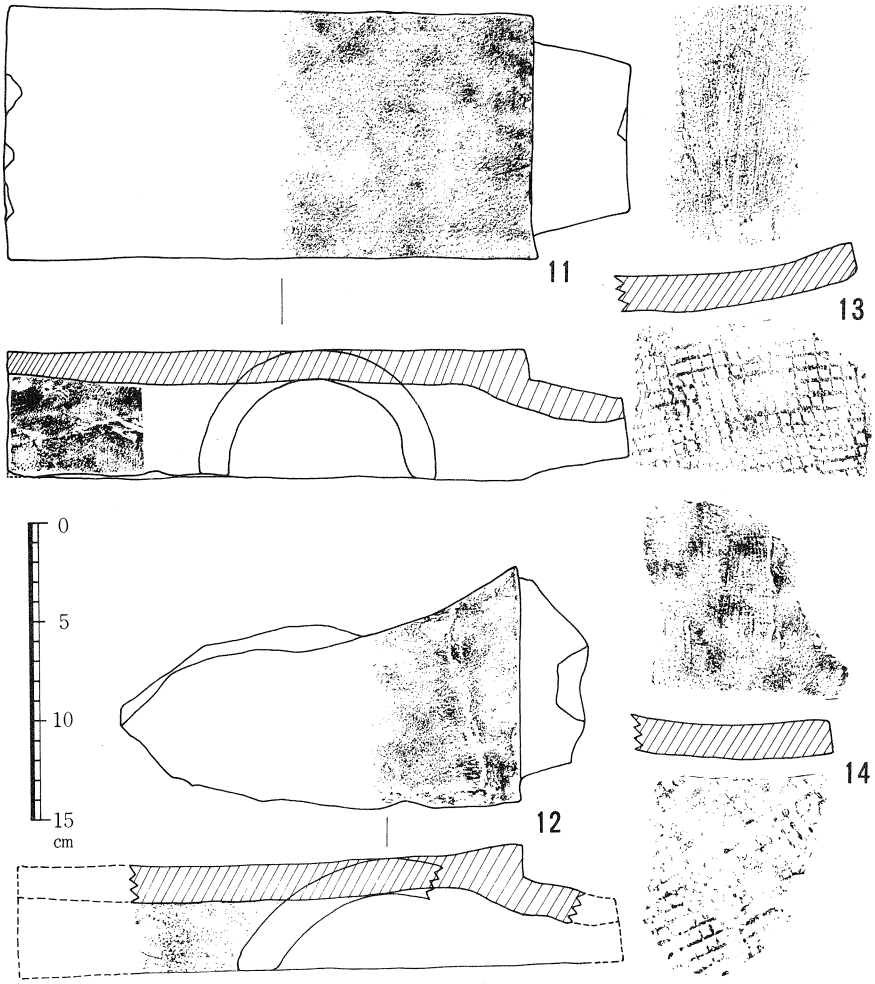
⑽は口径26.8cm、つば径36.2cm、残存高 7.0cmで、口縁部は長く直線的に内傾する。つばは水平につき端部は丸い。内外面ともにナデ調整を施されている。

銭（図版11－29）

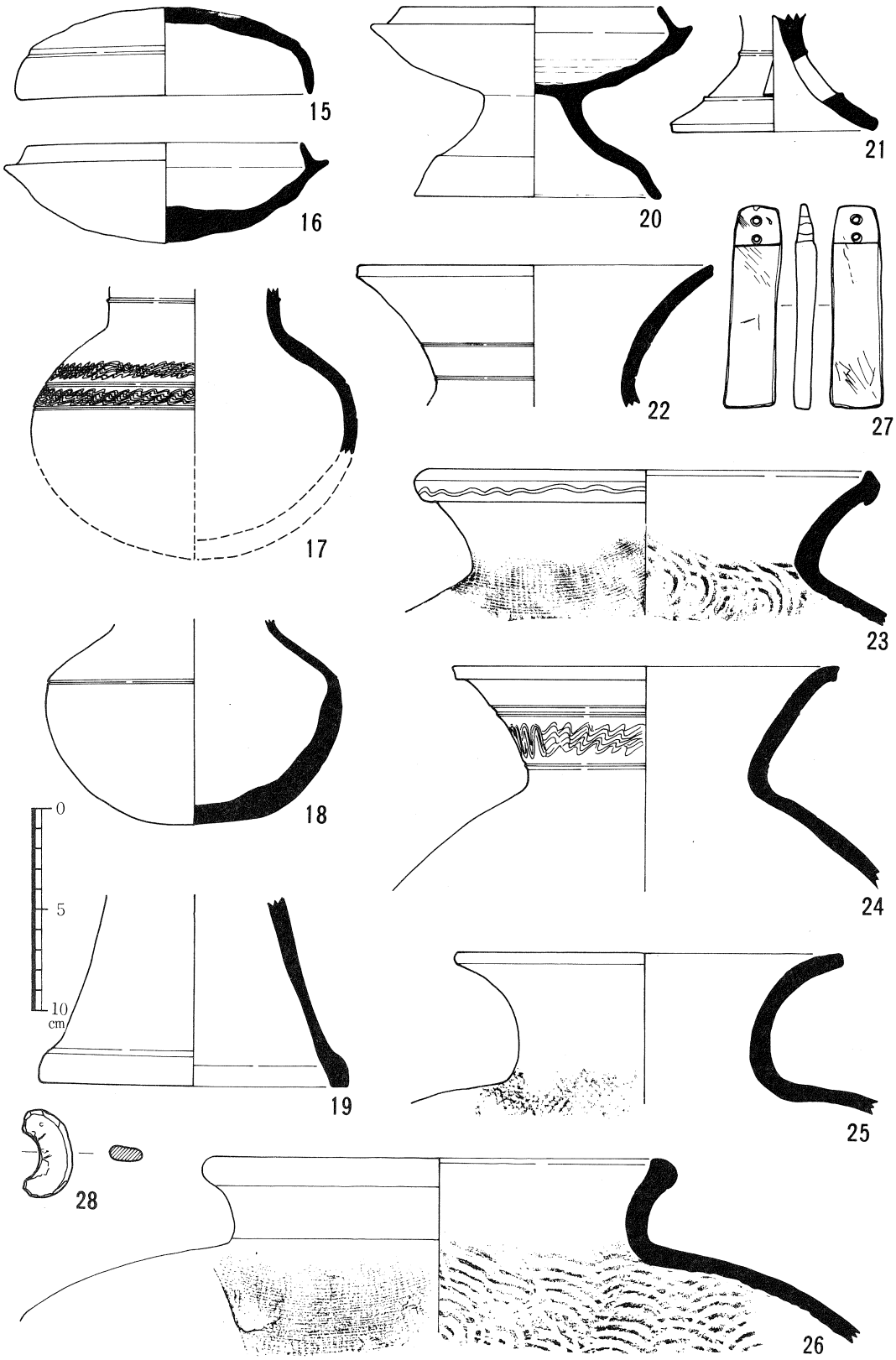
落ち込み状遺構肩部から熙寧元宝1点が出土している。熙寧の初鋳年は北宋・熙寧元年(1068)年である。日本に輸入されるのは宋貿易が栄んになる1150年以後と思われる。

瓦（第6図－11～14・図版8・図版11－11・図版13－13～14，38～39）

出土した瓦は丸瓦・平瓦の2種類である。丸瓦の形態は玉縁瓦2点が出土している。平瓦は格子叩き目と縄叩き目のものが出土している。



第6図　岡山南遺跡遺物瓦実測図・Ⅱ



第７図　岡山南遺跡遺物実測図・Ⅲ

玉縁瓦は表面に縄目が施されているが、その後のヘラ削りのため、縄目は不明瞭となっている。裏面には布目が施されており、隅に面取りが施されている。
平瓦は表面に布目が施され、裏面には縄目または格子目が明瞭に残っている。表面の布目がヘラナデによって消されているものもある。

青磁碗（図版13—33）

第Ⅴ層青灰色粘質土から2点が出土している。底部は欠失しているが、口縁端部は丸味をもたせている。内面は無文であるが外面体部に鎬蓮弁文を施すもので龍泉窯系青磁碗編年のⅠ—5類のものである。

鉢（図版13—34～37）

鉢には、須恵質と陶質のものがある。体部にまで釉がなく口縁部のみに自然釉がかかっているものが多い。中には全体的に須恵質のものについては、口縁部のみが黒くなって口縁端部が少しふくらみをつけたものが多い。すべての鉢の内面は体部中程から底部にかけてザラザラしており一般的に練鉢としての用途に使用していたものである。
すべての口縁部をみる限り片口部が残存しておらず片口になるか否かは不明である。

《大溝内出土遺物》

坏身・坏蓋（第7図—15～16・図版14—15・15—16）

⑮坏蓋は口径14.2cm、器高4.3cmを測る。口縁部は下外方に下がり端部は丸く、天井部はやや低く平らなもので稜は沈線を有し端部は丸い。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形を行い天井部外面に回転ヘラ削り調整を行い他は回転ナデ調整をそれぞれ施している。胎土はやや粗で焼成もやや良好なもので灰色を呈したものである。⑯坏身は口径13.3cm、器高4.9cm、たちあがり高1.4cm、受部径15.8cmを測る。たちあがりは短く内傾し端部はやや丸い。受部はやや水平にのび端部は丸く、底部はやや浅く丸い器形である。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形を行い底部外面⅔程度を回転ヘラ削りを行い、他は回転ナデ調整をそれぞれ施している。胎土は、0.1～0.5cmの白色砂粒を含むもので焼成は良好・堅緻である。

直口壺（第7図—17～18・図版14—17）

⑰の口頸部はほぼ直立し端部に至る。体部はややまるく、くの字形に張り出す。体部中位に最大径を有する体部から底部にかけて欠損、頸部に1条の凸線がまわり、体部に2条の沈線がめぐり、その間と上部に7本1条の波状文がそれぞれ施されている。手法の特徴は、マキアゲ、ミズビキ成形で口頸部ハリツケ、体部外面は回転ヘラ削り調整で内面は回転ナデ調整が施されている。胎土は密で焼成は良好、色調は灰色を呈している。
⑱の肩部は外下方に張り出す。底部は丸底を呈し、外上方にのび肩部に至る。体部最大径は上位に位置する。肩部に1条の沈線をめぐらす。手法の特徴は⑳と同様である。

台付壺〈脚部〉（第7図—19）

脚底径15cm、残存高9.4cmを測る。脚部は下外方に下り、裾部でやや内傾し、端部は平面を成し接地する。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形で回転ナデ調整を施している。
胎土は密で焼成は良好、堅緻。色調は青灰色を呈している。

有蓋高杯（第７図―20・図版15―20）

口径12.5cm、器高9.3cm、たちあがり高0.8cm、受部径15.5cm、基部径4.8cm、脚高4.9cm脚底径12cmを測る。たちあがりは短く内傾して端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸く底体部はやや浅く丸味をもつ。脚部は下外方に大きく開き、½上方より下外方に下り裾部に至る。端部は丸く平面をなす。手法の特徴は、マキアゲ、ミズビキ成形。杯底部はヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施す。

高　杯〈脚部〉（第７図―21・図版14―21）

脚底径9.8cm、残存高5.7cm、基部径2.8cm、脚高5.7cmを測る。脚部は下外方に広がりながら端部に至る。端部は丸く平面を成す。脚部上方と下方に２条の凸帯をめぐらし三方向に三角形のスカシを有する。手法の特徴は、マキアゲ、ミズビキ成形。胎土は密で0.1～2mmの白色砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。色調は黒灰色を呈している。

甕（第７図―22～26・図版15―25）

甕の口縁部形態は、口縁部に沈線をめぐらせ内弯し端部が丸いもの(22)・(24)、口縁部が下外方に下った後、上内方にのびて端部は丸くなるもの(23)、短く外反後上内方にのびるもの(25)、口縁部で外反し丸く屈曲し端部が丸いもの(26)と分けられる。

(22)は口径17.1cm、残存高6.8cm、基部径9.8cmを測る。口頸部は外傾して立ち上り口縁端部に沈線をめぐらせ内弯し端部が丸い。肩部から下は欠損。手法の特徴は、マキアゲ、ミズビキ成形を施している。胎土は密で焼成は良好で堅緻である。色調は灰褐色を呈している。

(23)は口径21.5cm、残存高７cm、基部径16.9cmを測る。口頸部は外弯しながら短く外上方にのび口縁部でわずかに下方に下り屈曲し、内弯しながら上方にのびる。端部はやや鋭い。口縁部外面に２本１条の波状文が施されている。肩部は内弯しながら下外方に下る。体部及び底部は欠損している。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形で肩部外面はタタキの後カキ目調整を施している。又、肩部内面は青海波タタキで他は回転ナデ調整をそれぞれ施している。胎土は密で0.1～3mmの白色砂粒を含む。焼成は良好、堅緻。色調は灰色を呈している。

(24)は、口径18.8cm、残存高11cm、基部径11.6mmを測る。口頸部は外傾しながら立ち上り、上方で更に外反し、端部は外傾する平面を成す。肩部は口頸部とほぼ100°を成して下外方へ丸味をもって下る。頸部上方に１条の沈線と下方に一条の凸線をまわり、その間に６本１条の波状文がそれぞれ施されている。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形を施している。胎土は密で0.1～3mm程度の白色砂粒を含む。焼成良好・堅緻、色調は灰色を呈している。

(25)は、口径18.8cm、残存高7.7cm、基部径12.6cmを測る。口頸部は外傾しながら立ち上り、上方で更に外反し、端部は外傾する平面を成す。肩部は口頸部から円をえがくように下外方へ下る。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形を施している。肩部外面は格子目タタキを施している。胎土は密で焼成は良好・堅緻、色調は茶褐色を呈している。

(26)は、口径21cm、残存高8.5cm、基部径20.4cmを測る。口頸部基部より内傾して短く直立したのち外反して立ち上り、さらに内側に屈曲して、さらに内弯して端部に至る。

体部は丸い肩部で外下方にやや大きく張り出す。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形で肩部外面はタタキの後カキ目調整、肩部内面は青海波タタキで他は回転ナデ調整をそれぞれ施している。胎土は密で0.1～3mmの白色砂粒を含む。焼成は良好・堅緻。色調は灰色を呈している。

砥　石（第7図—27・図版10・15—27）

最大長9.9cm、最大幅2.5cm、最大厚1.1cmを測る。断面長方形で表・裏の2面を使用している。側面及び下端部に製作時の切り痕がある。中央部が薄く0.8cmを測る。上部に0.5cmと0.4cmの円孔2ヶ所が両方から穿つ。石材は粘板岩製のものである。

勾　玉（第7図—28・図版10・15—28）

滑石製の勾玉で暗青色を帯びている。頭部から胴部にかけての側面は平滑面をもち、弱い稜を有する。ややC字形で均整のとれた形をしている。円孔は逆C字形に置いた一方からなされている。長さ4.4cm、幅1.7cm、頭部厚0.6cm、尾部厚0.5cm、円孔径0.2cmを測る。

埴　輪（図版14—43～48）

埴輪には円筒・きぬがさ・朝顔形が出ているが、大半が小破片であった。

(43)は朝顔形円筒埴輪で肩部のみ残存しており円筒上端の突帯だけ出土している。突帯の断面は台形状の扁平を呈しており突出度は低い。外面の調整は荒い横ハケが施されている。タガ下に円形の透しがある。全体の色調は黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。また胎土には砂粒が含まれている。

(44)の器壁は0.8cm前後でタガの幅は1cm、高さ0.6cm弱出ているにすぎない。外面はナデによる調整である。全体の色調は褐色を呈しており、焼成は硬質すなわち須恵質に焼かれている。胎土には0.1～3mm前後の白色砂粒が含まれている。

(45)・(46)の器壁は0.7～1.0cmでタガの幅は1cm、高さ0.6cmである。外面は縦方向のハケ目を施し内面には荒いハケ目が施されている。色調は黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

(47)・(48)の器壁は1.6cmと厚く、タガの幅は1.0cm前後でタガの突出度は極端に低い。色調は赤褐色を呈し、焼成は硬質である。胎土は0.1～4mm程度の白色砂粒を多く含まれている。

鉈（図版15—49）

かなり大型の鉈である。全長24.5cmで先端が丸くなっている。刃部の幅は約1.5cmで、使用のためか両端が丸くなっている。茎は断面が長方形である。

参考資料

清滝共同墓地において南畑芳雄氏が石積基礎工事現場において赤褐色粘土層の標高O.P.47.0m地点から須恵器、鉄斧・鉄刀が採集されている。以下遺物について説明しておきたい。

須恵器長頸壺（第8図—50・図版16）

口径10.4cm、器高16.9cm、器部径7.0cm、体部最大径15.4cmを測る。

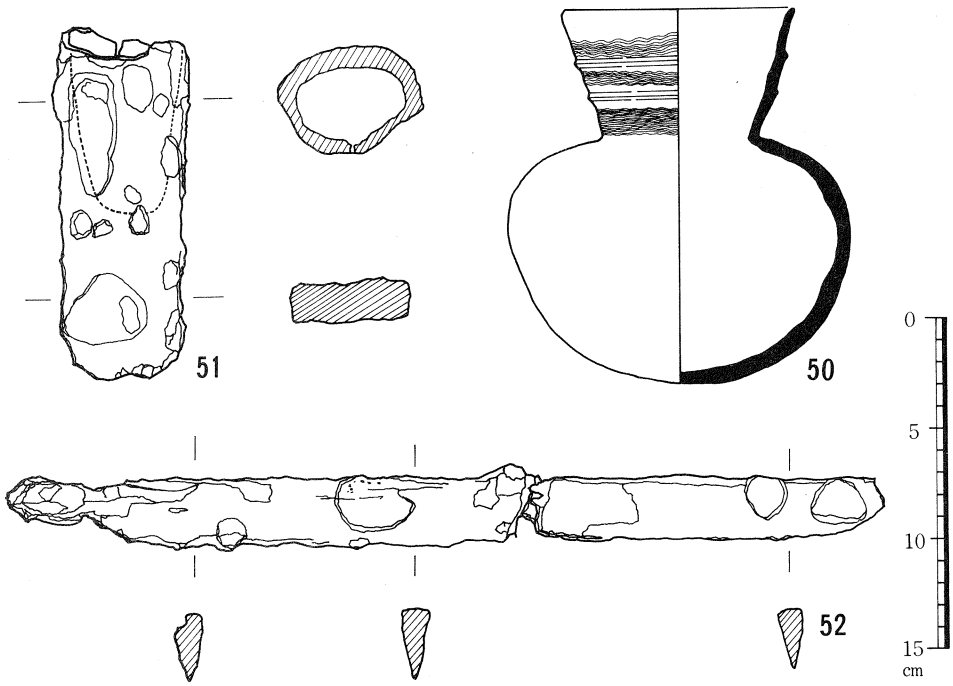
口縁部は外反して上方にのび、頸部の⅓と⅔のところで鋭い凸線を2条配し、それに界された間と上下に波状文からなる文様帯を有する。体部中位に最大径を有する球体をなし、安定性を欠く。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形、底部外面静止ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整である。胎土は密、焼成良好・堅緻。色調は灰色。

鉄　斧（第8図—51・図版16）

無肩式の鉄斧である。刃部は片刃である。袋穂部は両縁を折り曲げて断面楕円形の筒状にしている。全長15.9cm、刃幅4.8cm、袋穂部の長さ8cm、幅4.8cmである。

鉄　刀（第8図—52・図版16）

直刀である。中央付近で折損する。現存長約39.7cm、幅約3.1cm、厚さは峰で約1.2cmで断面は鉈のふくらまない二等辺三角形状である。茎は欠失しており不明であるが尻の方になるほど細くなり、刃関部は刃部と直角につくられている。



第8図　清滝共同墓地遺物実測図・Ⅰ

V まとめ

今回の調査面積約100㎡の中で発見された遺構は、古墳時代後期の溝1基・鎌倉時代末の掘立柱建物跡・室町時代の落ち込み状遺構1基が確認され、各遺構内から時代決定を行う土器・鉄製品・石製品・瓦等が多量に出土した。

調査で得た史料と遺物をすべて完全に報告するには膨大な量であり、周辺の遺構と合わせて今後調査報告書を刊行していきたい。従って以下、今回の調査区で検出した遺構の時期において過去の6次にわたる調査をふまえて少し補足しておきたい。

第1に今回の調査地点が岡山南遺跡の東方に位置し、また清滝古墳群の北方にあり、この場所が古墳時代の集落と墓との接点を考える上で重要な位置を示す。

すなわち、岡山南遺跡第3次・第4次・第6次等の発掘調査で検出した延長約50m、幅約2～3.5m、深さ約1～1.2mのU字状を呈した逆S字形の大溝B遺構が堆積され始まる時期と同じ頃であり、又、隣接地で採集された須恵器長頸壺・鉄斧・鉄刀は墓地であり、大溝Bが掘られた頃に相当することから、同じ人々の集落と墓地である可能性が強い。

また、この場所から眼下には河内湖北岸が一望に見わたせられる海抜40mの所に立地しており、すぐ南側には清滝古墳群の直径20m前後の円墳を築造していた時でもある。

この清滝古墳群第2号墳や岡山南遺跡掘立柱建物跡・奈良井遺跡の一辺約40mの方形周溝遺跡内から5世紀末から6世紀初頭にかけての馬骨及び馬歯が数多く発掘している。

清滝古墳群第2号墳周溝内から一頭分の馬歯が出土している。岡山南遺跡第5次調査において掘立柱建物跡周辺から馬歯が散乱して出土している。最後に奈良井遺跡から先にも述べた一辺約40mの方形周溝内に馬一体を長さ約2mの板の上に横位の状態で埋葬されているものや、頭骨だけを切り取り周溝内に土壙を掘りその中に埋葬されているものを含め、奈良井遺跡だけで6頭分の馬が埋葬されている例がある。

馬骨・馬歯の出土は、大阪府下では古墳時代の5世紀から6世紀にかけての馬の出土遺跡は31遺跡、中世の馬の出土遺跡は6遺跡が現在までに知られている。

特に河内湖の東岸及び北岸地域、すなわち生駒西麓の四條畷・東大阪・八尾・柏原の各市に集中していることは、生駒西麓と河内湖との間一帯が数多くの馬飼いに適していたものであり、馬骨・馬歯が出土する遺跡は馬飼いを生業とするムラがあったことが伺うことができる。

第2に岡山南遺跡の中世村落としての開始時期は、第5次発掘調査地区内の方形板枠井戸から墨書された黒色土器や、今回の調査地区内の掘立柱建物跡や第3次発掘調査地区内の掘立柱建物跡から瓦器椀・土師質皿・羽釜等の土器編年から12世紀中頃から13世紀にかけて集落が営なまれたものである。

隣接地の忍ケ丘駅前遺跡においても同様に石組井戸内から曲物底板と瓦器椀の出土が認め

られ、又、土器口縁部を再利用した常滑の大甕を井戸の井筒として使用されていることからほぼ岡山南遺跡と忍ケ丘駅前遺跡は同じ頃に開始された集落であった。

第３に四條畷に搬入された中国産の輸入陶磁器は、各時代の資料が知られている。

これまでに知られている出土資料は、今回の調査地区の落ち込み状遺構から出土した青磁碗は口縁部は丸味をもたせたもので、内面は無文であるが外面体部に鎬蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類のものが出土している。

坪井遺跡から青磁皿と白磁碗・皿が出土している。青磁皿は内面見込み部に櫛状施文具とヘラ状施文具に文様をもつ同安窯系Ⅰ－２類のもの。白磁碗は玉縁をもつⅥ－1aと口縁が外反するⅤ－3aの２種類の碗。白磁皿は平底の底部で内面見込み部にヘラ状施文具による文様をもつⅧ類に属するものが出土している。

忍ケ丘駅前遺跡から、白磁碗２点と白磁皿が１点出土している。白磁碗は玉縁口縁をもつⅣ－1aと白磁皿は平底の底部のⅨ－１類に属するものが出土している。最後に中野遺跡から景徳鎮系の白磁合子が石組井戸内から出土している。

以上で四條畷市内出土の中国産の輸入陶磁器を見たが、それらの土器は13世紀から14世紀の陶磁器を知る手掛りを得た。

第４に中世の主な窯業地は、瀬戸・常滑・信楽・備前・丹波・越前の六古窯がある。四條畷及びその周辺地域から出土するものは、瀬戸焼・常滑焼・備前焼が圧倒的に多く、常滑焼は12世紀ぐらいから、備前焼は13世紀ぐらいから、瀬戸焼は14世紀ぐらいからそれぞれ流入しはじめている。

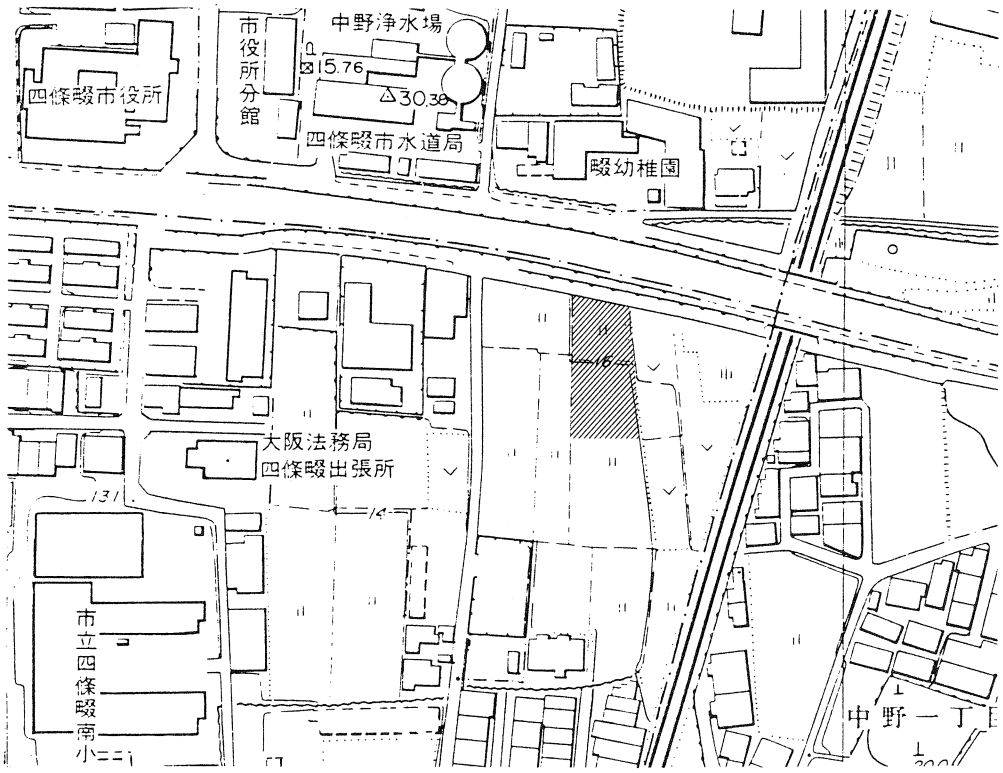
瀬戸焼の水滴が今回の落ち込み状遺構の第Ⅴ層青灰色粘質土から出土している。同形のものは、高槻市岡本山古墳、福井県一乗谷遺跡や生産地である瀬戸市内各古窯からよく知られている。また忍ケ丘駅前遺跡の枚方信用金庫忍ケ丘支店建設に伴う調査において、幅約４ｍ、長さは調査範囲の約13ｍの旧河川を検出し第３層から口径12.8㎝、器高3.5㎝の瀬戸焼おろし皿１点が出土している。これらの瀬戸焼は、古瀬戸の最盛期で古窯跡の分布も瀬戸市域全域に展開して生産活動がなされていた。これらの瀬戸焼・常滑焼・備前焼は陸路の運搬ではなく海運による流通であると思われ、距離的に近い信楽・丹波などからの流通は陸路であるために持ち込まれる量が少ない理由であると思われる。

中 野 遺 跡（第６次調査）

Ⅰ．は じ め に

四條畷市中野本町１に所在する中野遺跡は、生駒山系から派生する丘陵地形の上に立地している。なお、付近の丘陵には多くの遺跡が存在しており、特に古墳時代と中世の遺跡が多い。

中野遺跡の調査は昭和51年度に国鉄片町線複線化に伴う調査を国道163号線と交叉する場所を中心に調査を実施し、その後、昭和52年から昭和53年にかけて大阪瓦斯天然ガス管埋設工事に伴ない国道163号線南側の側道と片町線西側の岡嶋胡粉砥粉製造株式会社の工場敷地内の調査を実施している。この調査において大溝が確認され、古墳時代中期の多量の土器とともに製塩土器及び馬の下顎が北河内で初めて出土し、河内湖畔における製塩活動の場所であったことが証明された。又、馬の出土によって、中野遺跡が馬飼いの集団の生活場所であったことも推定される重要な場所でもあった。その後、国道163号線の拡

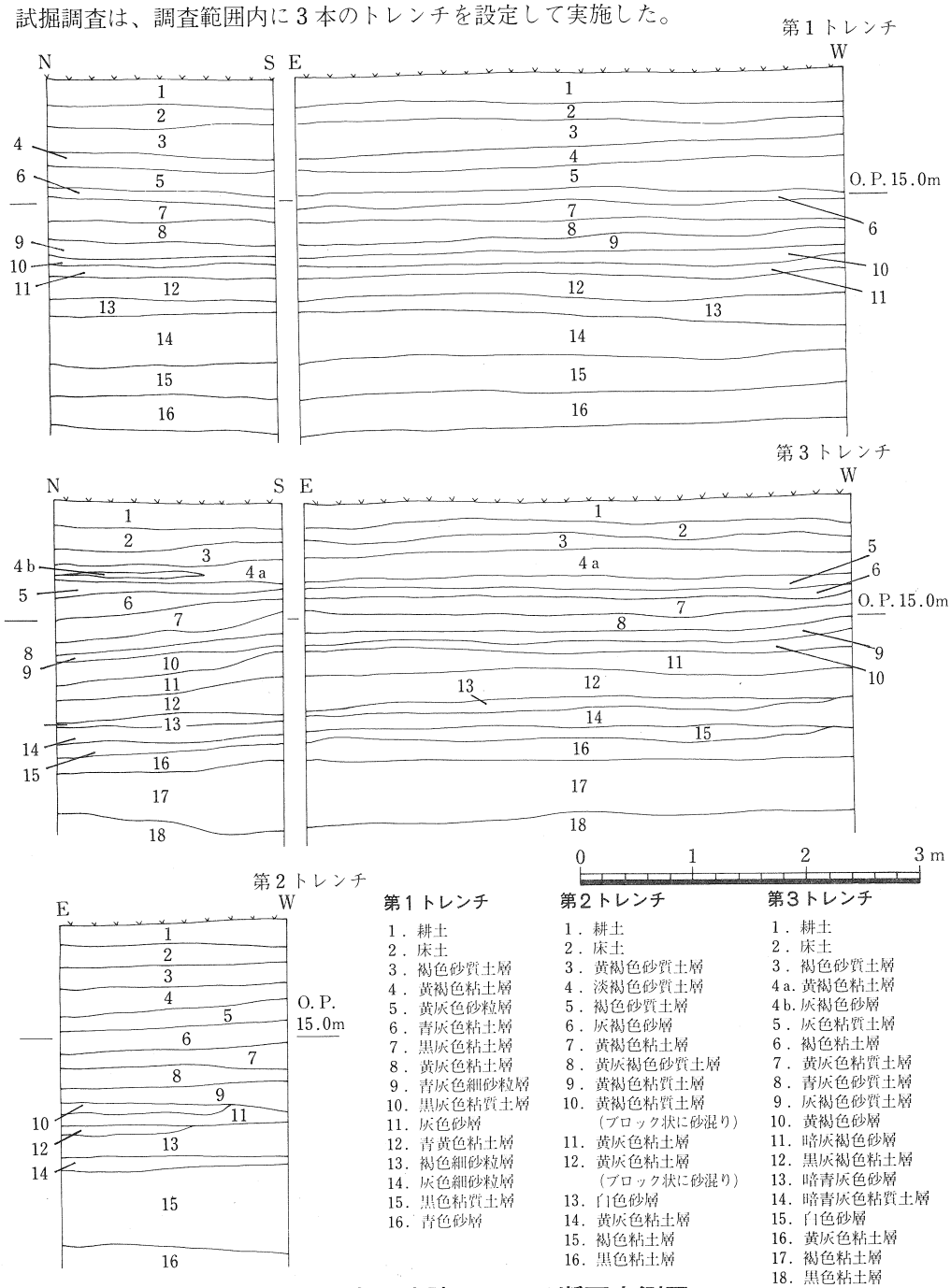


第９図　中野遺跡調査地位置図

幅工事に伴う調査や、電々公社の地下埋設ケーブル工事に伴う調査において古墳時代の建物跡や、中世の溝・石組井戸・曲物井戸などが多数検出され、古墳時代中期と鎌倉時代から室町時代にかけての複合遺跡である地域であった。

調査概要報告

試掘調査は、調査範囲内に3本のトレンチを設定して実施した。



第1トレンチ

1．耕土
2．床土
3．褐色砂質土層
4．黄褐色粘土層
5．黄灰色砂粒層
6．青灰色粘土層
7．黒灰色粘土層
8．黄灰色粘土層
9．青灰色細砂粒層
10．黒灰色粘質土層
11．灰色砂層
12．青黄色粘土層
13．褐色細砂粒層
14．灰色細砂粒層
15．黒色粘質土層
16．青色砂層

第2トレンチ

1．耕土
2．床土
3．黄褐色砂質土層
4．淡褐色砂質土層
5．褐色砂質土層
6．灰褐色砂層
7．黄褐色粘土層
8．黄灰褐色砂質土層
9．黄褐色粘質土層
10．黄褐色粘質土層（ブロック状に砂混り）
11．黄灰色粘土層
12．黄灰色粘土層（ブロック状に砂混り）
13．白色砂層
14．黄灰色粘土層
15．褐色粘土層
16．黒色粘土層

第3トレンチ

1．耕土
2．床土
3．褐色砂質土層
4a．黄褐色粘土層
4b．灰褐色砂層
5．灰色粘質土層
6．褐色粘土層
7．黄灰色粘質土層
8．青灰色砂質土層
9．灰褐色砂質土層
10．黄褐色砂層
11．暗灰褐色砂層
12．黒灰褐色粘土層
13．暗青灰色砂層
14．暗青灰色粘質土層
15．白色砂層
16．黄灰色粘土層
17．褐色粘土層
18．黒色粘土層

第10図　中野遺跡トレンチ断面実測図

第１トレンチは、調査地区のほぼ中央に幅２ｍ、長さ4.8ｍの東西方向にトレンチを設定した。

層序は、第１層・耕土、第２層・床土、第３層は厚さ約15～30cmの褐色砂質土層、第４層は厚さ約10～15cmの黄褐色粘土層、第５層は厚さ約15～30cmの黄灰色砂粒層、第６層は厚さ約10cmの青灰色粘土層、第７層は厚さ約10～20cmの黒灰色粘土層、第８層は厚さ約15～20cmの黄灰色粘土層、第９層は厚さ約10～15cmの青灰色細砂粒層、第10層は厚さ約６～12cmの黒灰色粘質土層、第11層は厚さ約10～15cmの灰色砂層、第12層は厚さ約20cmの青黄色粘土層、第13層は厚さ約10～25cmの褐色細砂粒層、第14層は厚さ約20～45cmの灰色細砂粒層、第15層は厚さ約25cmの黒色粘質土層、第16層は厚さ約25cmの青色砂層が堆積している。

第３層内から須恵器坏身・坏蓋・壺・土師器甕・瓦質甕、瓦器・土師質甕・小皿がそれぞれ出土した。

古墳時代及び中世の土器が第３層の褐色砂質土層からの出土であって、中世以降に削平され攪乱されていた。また第３層以下の黄褐色粘土層から第14層の灰色細砂粒層までの約1.8ｍの堆積土層からの遺物は見い出せなかった。しかし、第15層の黒色粘質土層には自然木が炭化した状況で出土したが全くその時期に比定される伴出遺物はなかった。

すなわち、第４層の黄褐色粘土層が地山とみることができる。

第２トレンチは、第１トレンチの西約10ｍのところに幅２ｍ、長さ２ｍのトレンチを設定した。水田面の標高は第１トレンチとほぼ同様海抜16ｍ前後であった。

層序は、第１層・耕土、第２層・床木、第３層は厚さ約20cmの黄褐色砂質土層、第４層は厚さ約10～20cmの淡褐色砂質土層、第５層は厚さ約15～20cmの褐色砂質土層、第６層は厚さ約20cmの灰褐色砂層、第７層は厚さ約10～15cmの黄褐色粘土層、第８層は厚さ約10～15cmの黄灰褐色砂質土層、第９層は厚さ約10～25cmの黄褐色粘質土層、第10層は厚さ約10cmの黄褐色粘質土層（ブロック状に砂混り）、第11層は厚さ約10～15cmの黄灰色粘土層、第12層は厚さ約８cmの黄灰色粘土層（ブロック状に砂混り）、第13層は厚さ約20～32cmの白色砂層、第14層は厚さ約６～10cmの黄灰色粘土層、第15層は厚さ約70cmの褐色粘土層、第16層は黒色粘土層へと堆積している。

このトレンチ内からは出土遺物は全く見い出せなかった。

第３トレンチは第１トレンチと第２トレンチとの間の南側に幅２ｍ、長さ５ｍの東西方向にトレンチを設定した。

層序は、第１層・耕土、第２層・床土、第３層は厚さ約10～15cmの褐色砂質土層で以下第１トレンチ同様に第４層黄褐色粘土層の地山となる。

第３層の褐色砂質土層から瓦器埦・土師質小皿片が出土した。

出土遺物

出土遺物は第1トレンチ内第3層褐色砂質土層から出土したものが大部分を占め、須恵器蓋・坏・土師器甕・瓦質土器・瓦器椀・土師質甕・小皿の各土器が同一層内からの出土であって、実測可能な遺物を第11図として報告しておきたい。

須恵器蓋坏（第11図—53～60・図版21—53～60）

(53)は高坏の蓋で口径11.5cm、器高5.3cm、稜径12.6cmを測る。径3.1cm、つまみ高1.1cmを測る。口縁部はわずかに外反して下り、端部は内傾する段を成す。稜は比較的短かく断面三角形を成す。天井部は高く丸い。中央には基部の太い上面凹状のつまみを付す。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない。つまみはハリツケによる。天井部外面⅓は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で白色砂粒を含み、焼成は良好、堅緻である。

(54)は蓋坏の蓋で口径12.0cm、器高5.0cm、稜径12.6cmを測る。口縁部は垂直に近くわずかに外反して下り、端部は内傾する段を成す。稜は断面三角形を成し端部は鋭い。天井部はやや高く丸い。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、天井部外面⅚は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で0.1～3.0mmの白色砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻である。

(55)は蓋坏の蓋で口径11.8cm、器高(推定)4.0cm、稜径11.8cmを測る。口縁部はやや下外方に下り、端部は内傾する段を成す。稜は小さく断面三角形を成し鈍く、天井部はやや浅く平らに近いと思われる。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、天井部外面のヘラ削り調整部は欠失して不明である。他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で0.1～3.5mmの白色砂粒を含む。焼成良好、堅緻である。

(56)は蓋坏の蓋で口径13.0cm、器高4.6cm、稜径12.4cmを測る。口縁部はやや下外方に下り端部は内傾する段を成す。稜は小さく断面三角形を成し端部は鋭い。天井部はやや高く丸い。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、天井部外面½は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で白色砂粒を含む。焼成良好・堅緻である。

(57)は蓋坏の蓋で口径13.3cm、高器4.7cm、稜径12.7cmを測る。口縁部は下外方に下り端部は内傾する段を成す。稜は断面三角形を成し端部は鋭い。天井部は高く丸い。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、天井部外面⅓は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で白色砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻である。

(58)は蓋坏の身で口径12.3cm、器高4.7cm、たちあがり高1.4cm、受部径15.3cm、底体部高

3.3cmを測る。たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。受部は外上方にのび端部は丸い。底体部は深く、底部は平らに近い。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、底体部外面⅓は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で焼成は良好・堅緻である。

(59)は蓋坏の身で口径12.4cm、器高(推定)5.0cm、たちあがり高1.3cm、受部径14.6cmを測る。たちあがりは、内傾してのび端部は内傾する段を成す。受部は外上方にのび端部は丸い。底体部はやや深く丸味をもつと思われる。

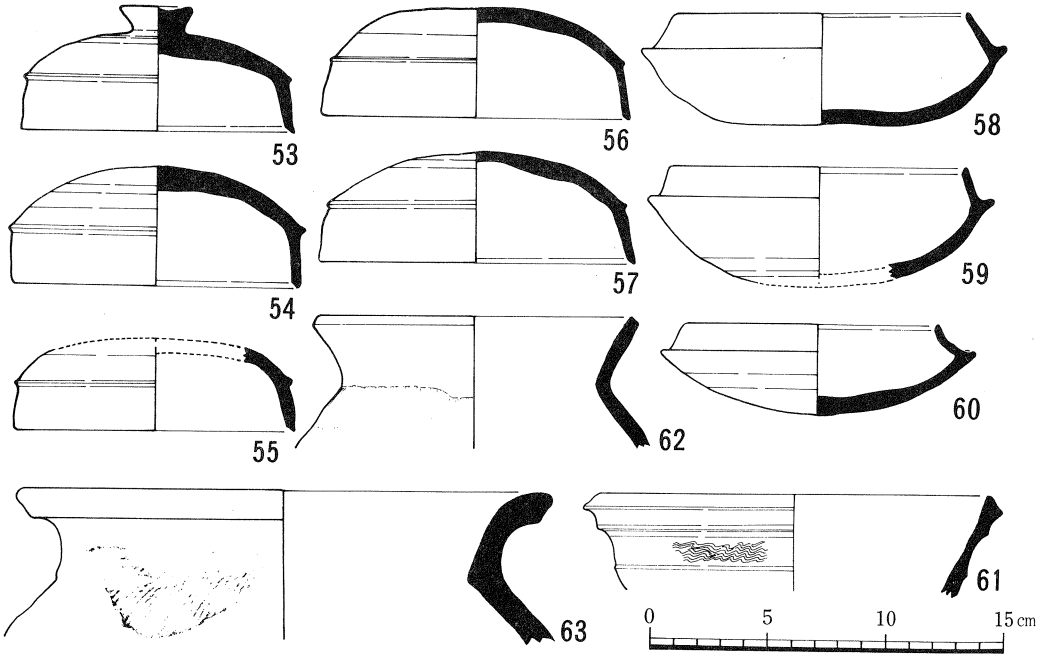
手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、底体部外面の回転ヘラ削り調整部は欠失して不明である。他は回転ナデ調整を施している。胎土は密で0.1～4mmの白色砂粒を含む。焼成は良好・堅緻である。

(60)は蓋坏の身で口径10.6cm、器高3.8cm、たちあがり高1.2cm、受部径13.3cm、底体部高2.6cmを測る。たちあがりは内傾してのび端部は内傾する段を成す。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。底体部はやや浅く丸い。

手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、底体部外面¾は回転ヘラ削り調整で他は回転ナデ調整を施している。胎土はやや密で0.1～2mmの白色砂粒を含む。焼成良好・堅緻である。

甕（第11図―61）

(61)は甕で口径16.5cm、残存高4.0cmを測る。口頸部は外反して上外方にのび、外端面は



第11図　中野遺跡遺物実測図・Ⅰ

平面を成す。口頸外面には鈍い凸帯をめぐり、その間には7本1条の波状文を施している。手法の特徴はマキアゲ、ミズビキ成形をおこない、回転ナデ調整を施している。胎土は密で焼成良好・堅緻である。

土師器甕（第11図―62）

⑵は口径13.2cm、残存高5.5cmを測る。口縁部は「く」の字に外折し、やや外弯ぎみに外上方に開く。内外面ともにナデ調整を施している。胴部外面は縦方向に刷毛目を施している。胎土は0.1～5mmの白色砂粒を含む。

瓦質甕（第11図―63）

⑶は口径22.4cm、残存高6.2cmを測る。内傾して立ち上がる肩部が大きく外反して口縁部となる。体部外面には縦方向のタタキ目を施している。内面はヘラ削りによって器面調整、口縁部はヨコナデ調整を施す。胎土は0.1～1mmの長石を含む。

おわりに

中野遺跡の今回の調査はトレンチによる確認調査で、出土するトレンチは第1トレンチと第3トレンチの褐色砂質土層のみであった。しかもこの層位は中世以降の削平によって攪乱されたもので、出土遺物には、古墳時代のものと中世のものが同時に出土した。

中野遺跡第3次発掘調査を実施した大阪瓦斯天然ガス管埋設工事に伴う調査において検出した大溝は、今回の調査地には全く検出されず西側の水田地に検出される可能性が出てきた。又、大溝から出土した古墳時代中期の土師器朱塗壺・甕・製塩土器と一緒に石製紡錘車・臼玉・勾玉等の石製品や馬の下顎が出土していたが、今回の調査でこれらの時期に比定される遺物は全く出土していない。

図版

図版1　遺跡周辺の航空写真

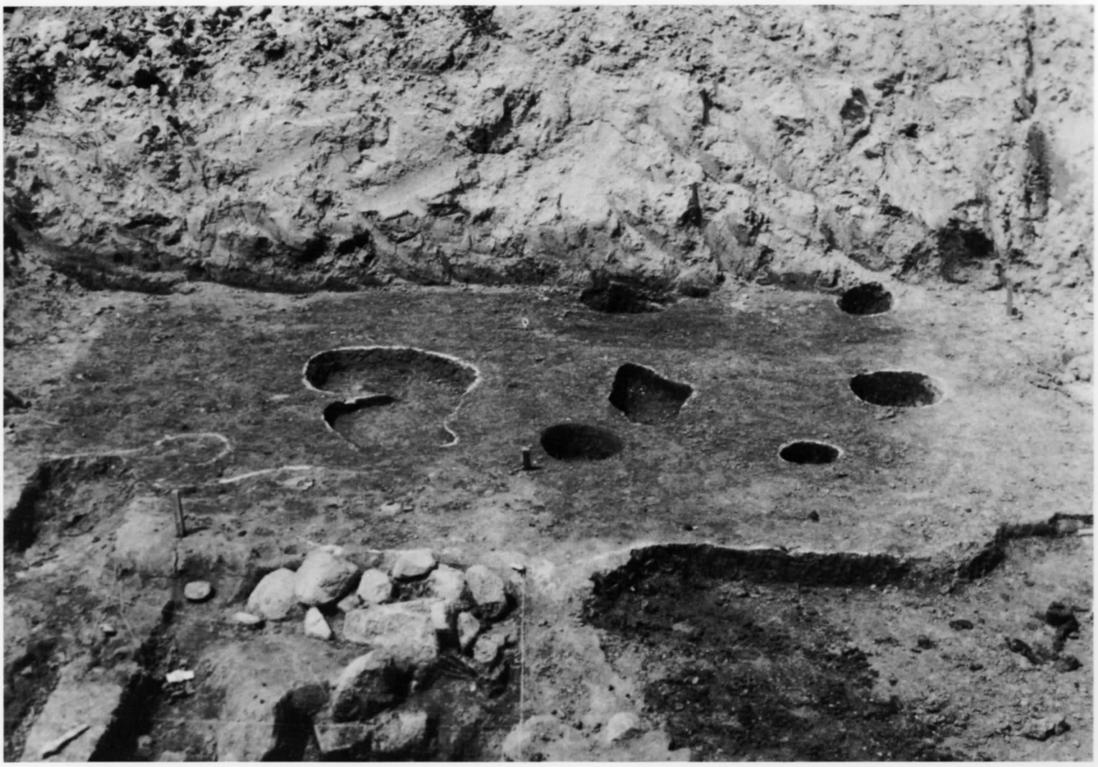
図版2　岡山南遺跡遠景

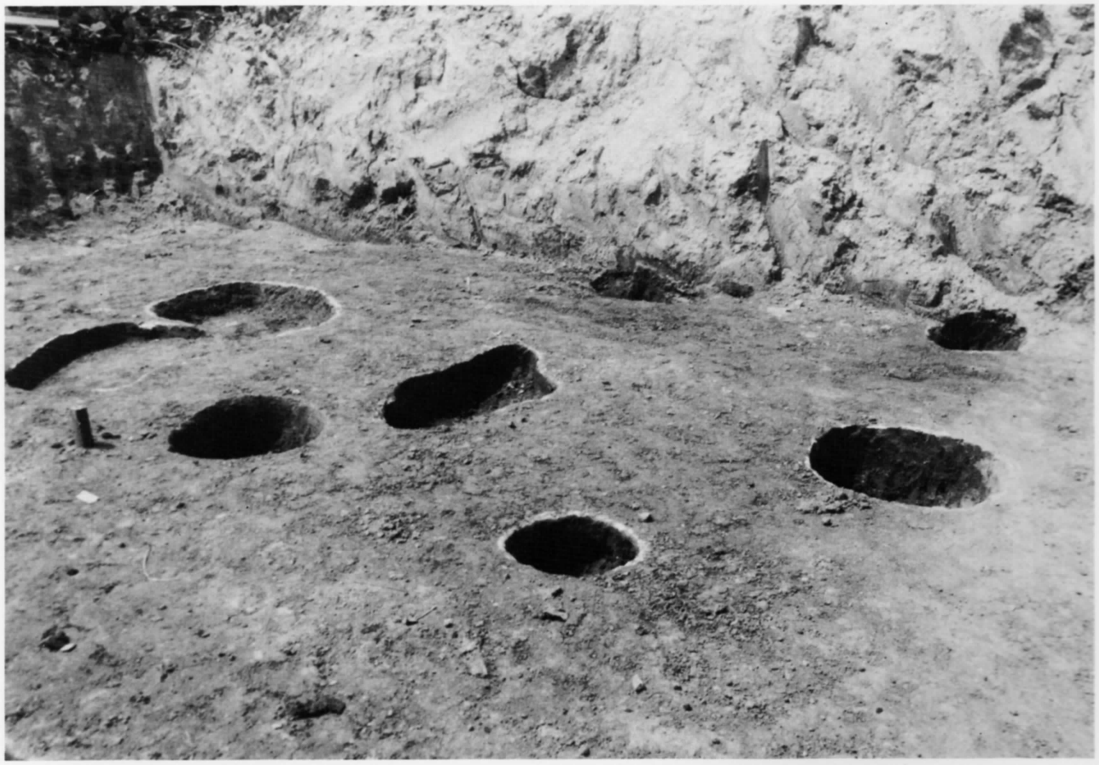
図版3　岡山南遺跡近景

図版4　岡山南遺跡遺構全景

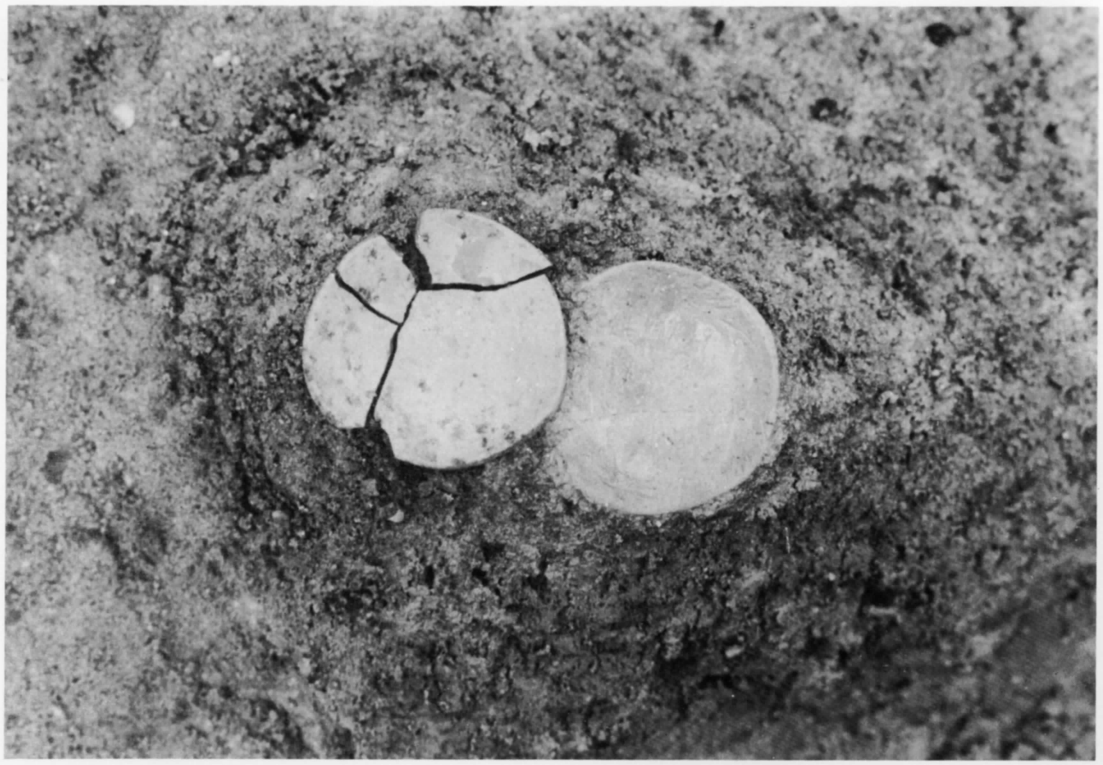
図版5　岡山南遺跡落ち込み状遺構全景

図版6　岡山南遺跡掘立柱建物跡全景

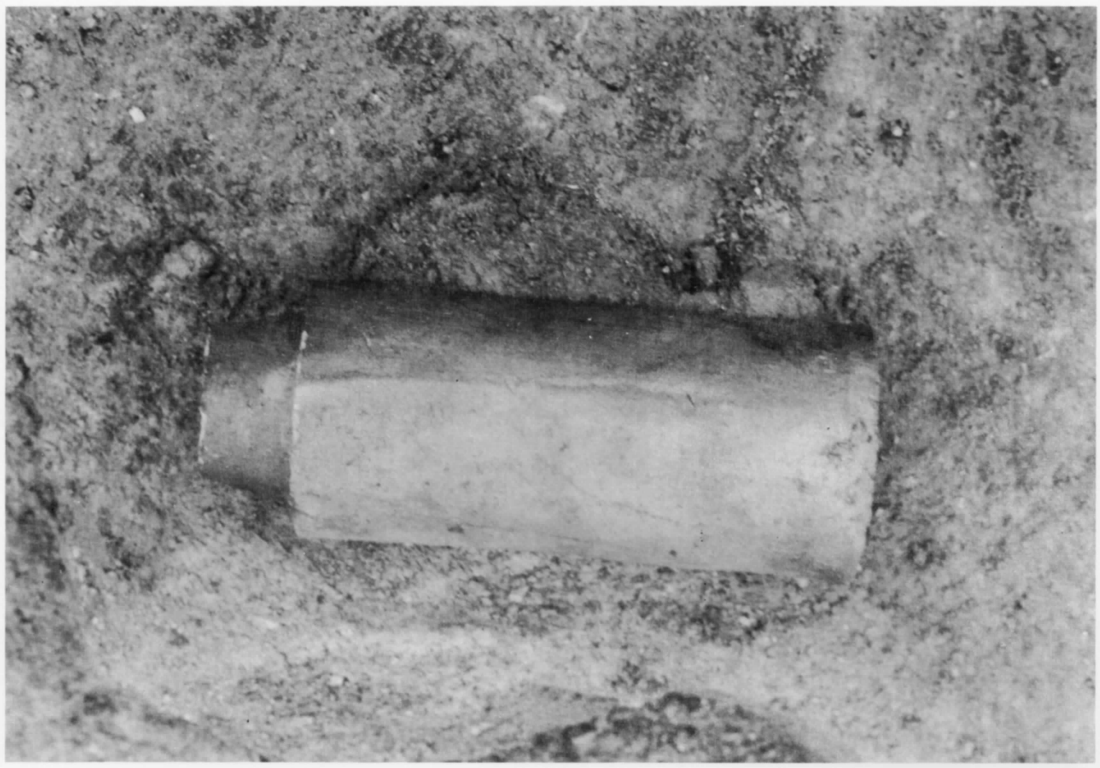


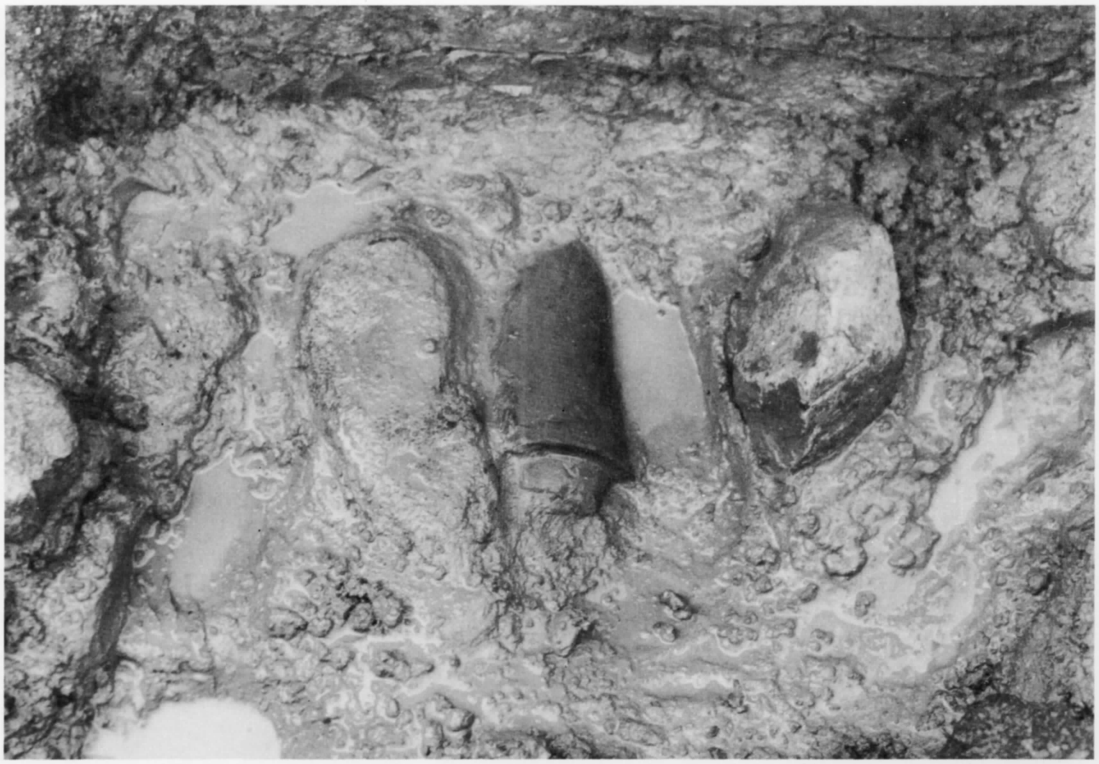


図版7　岡山南遺跡落ち込み状遺構内遺物出土状況・I



図版8　岡山南遺跡落ち込み状遺構内遺物出土状況・Ⅱ





図版9　岡山南遺跡落ち込み状遺構及び大溝内遺物出土状況・Ⅲ

図版10　岡山南遺跡大溝内遺物出土状況・Ⅳ

図版11　遺物写真・I

1

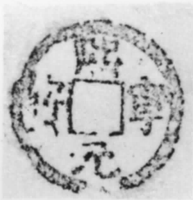
2

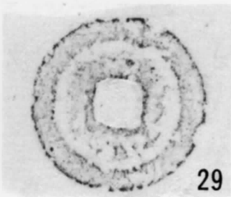
3

4

5

5′

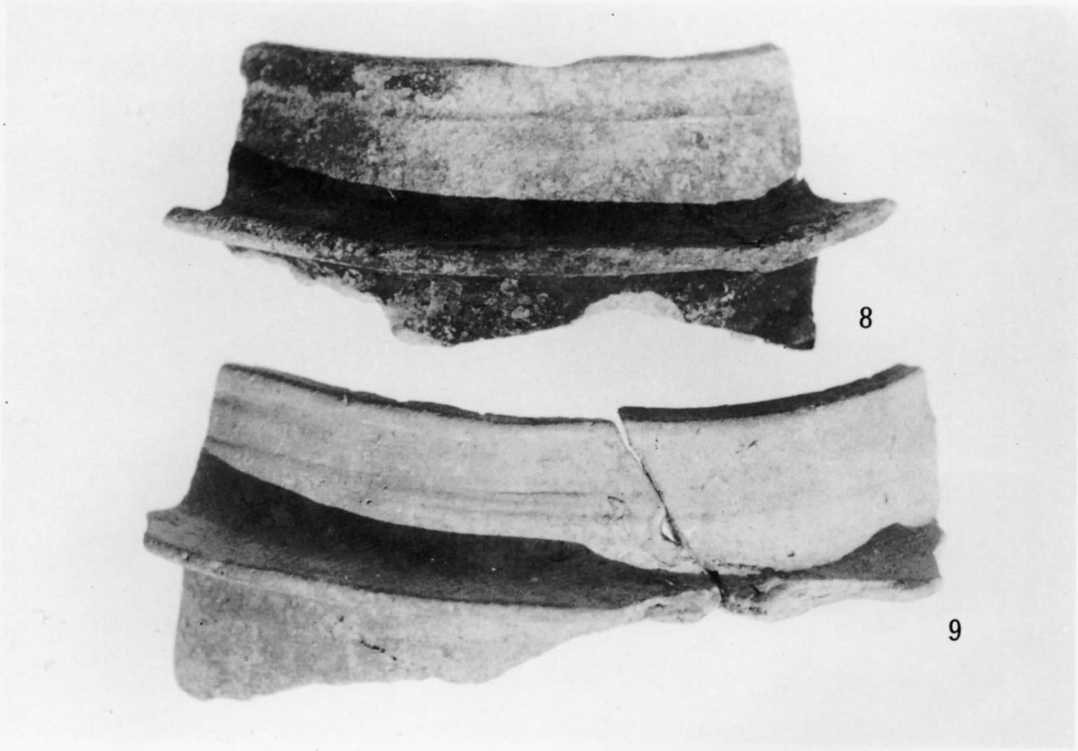


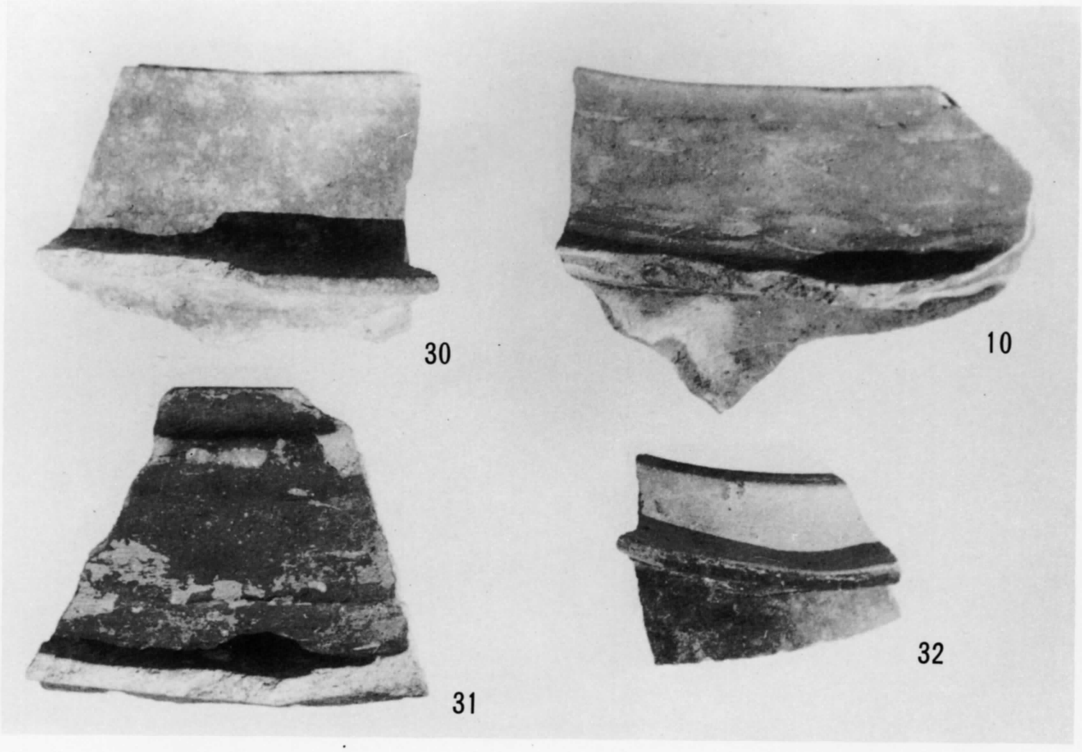

29

11

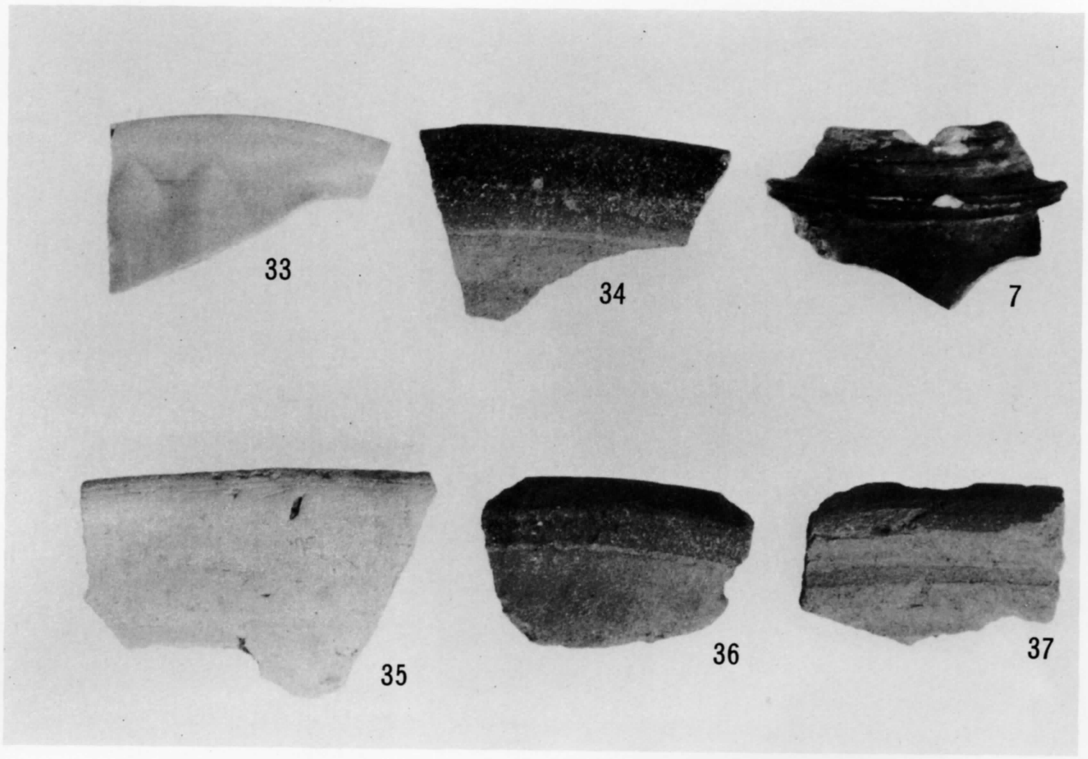
11′

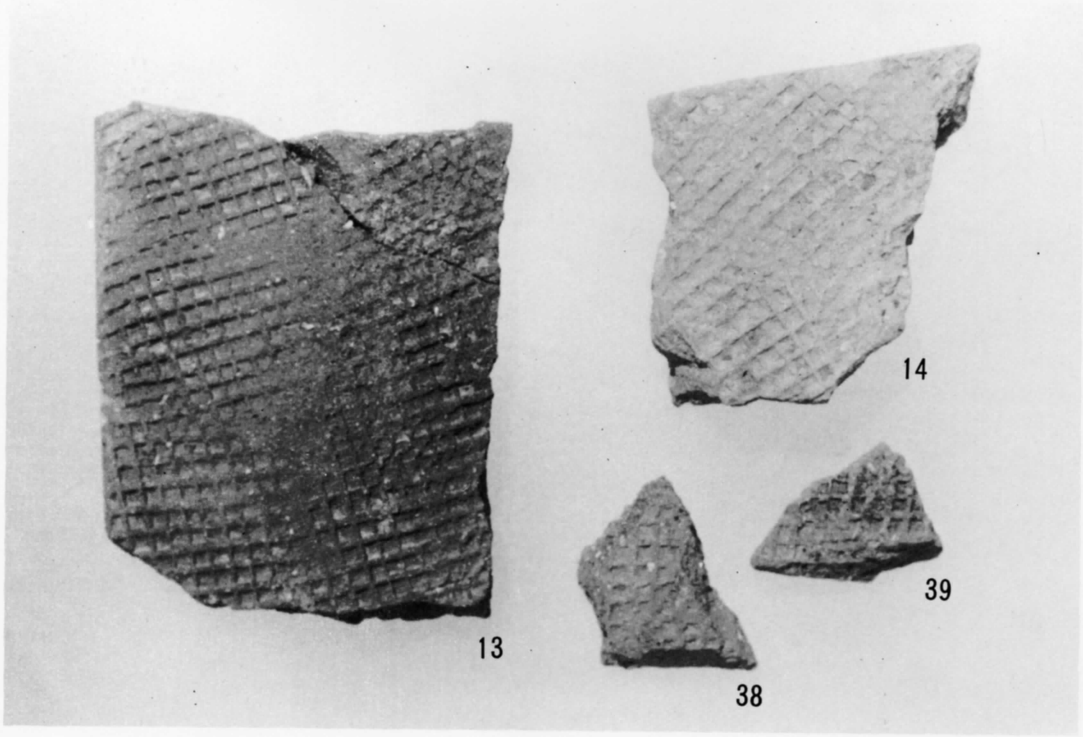
図版12　遺物写真・Ⅱ



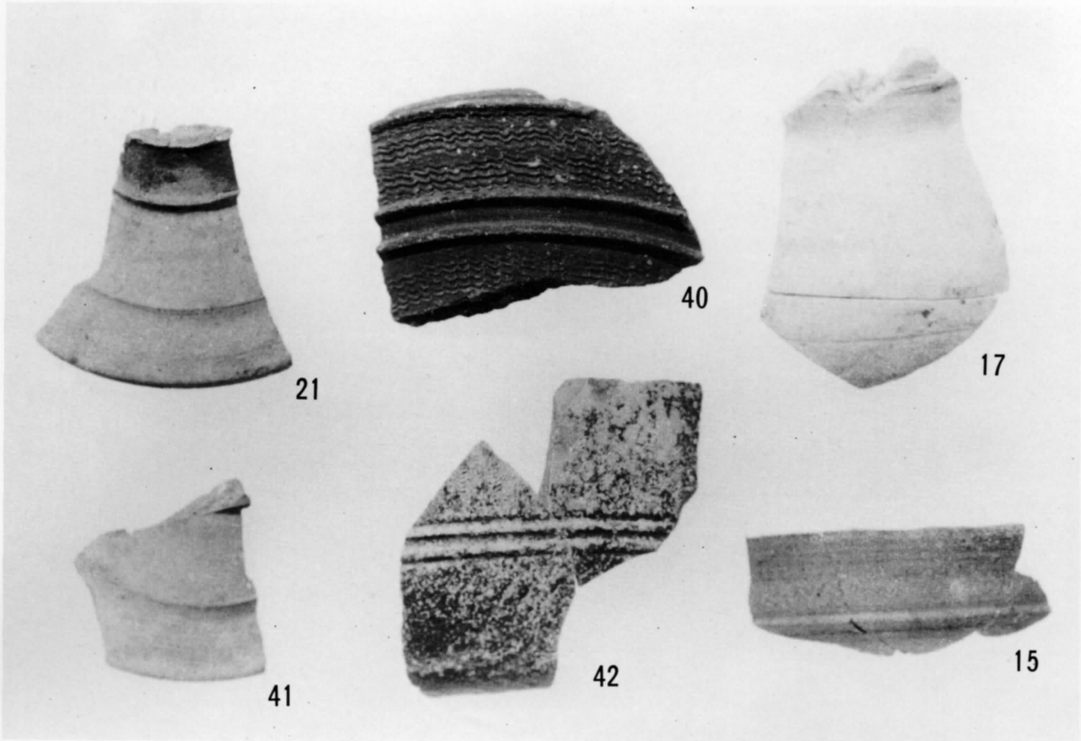


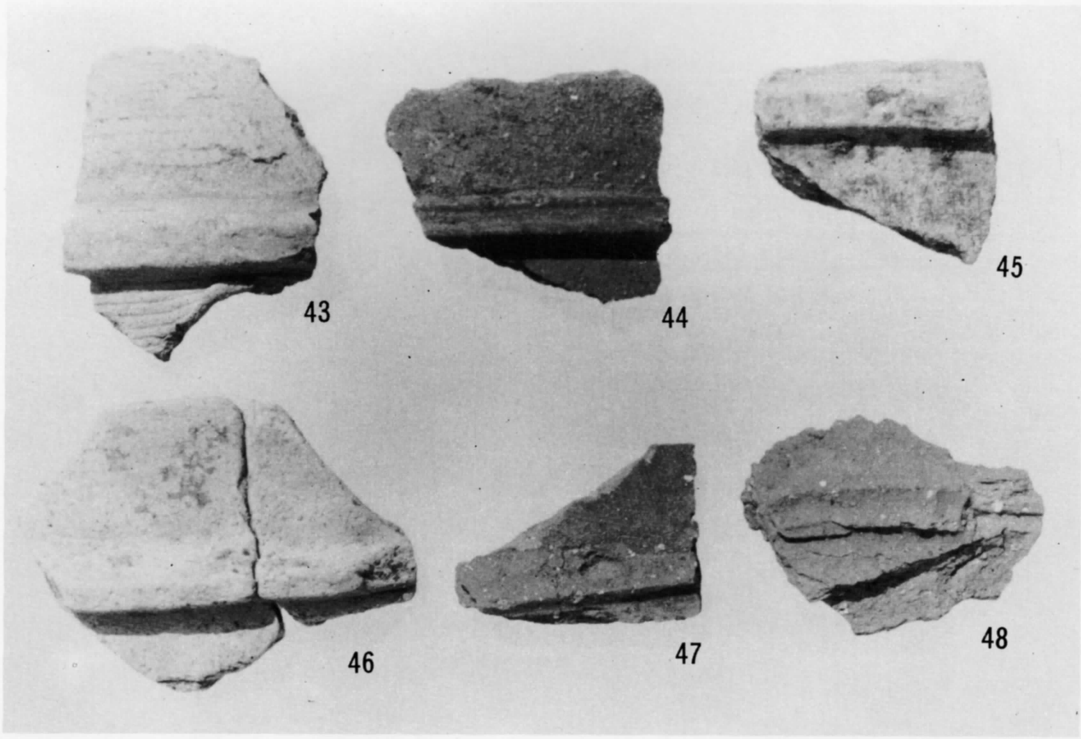
図版13　遺物写真・Ⅲ

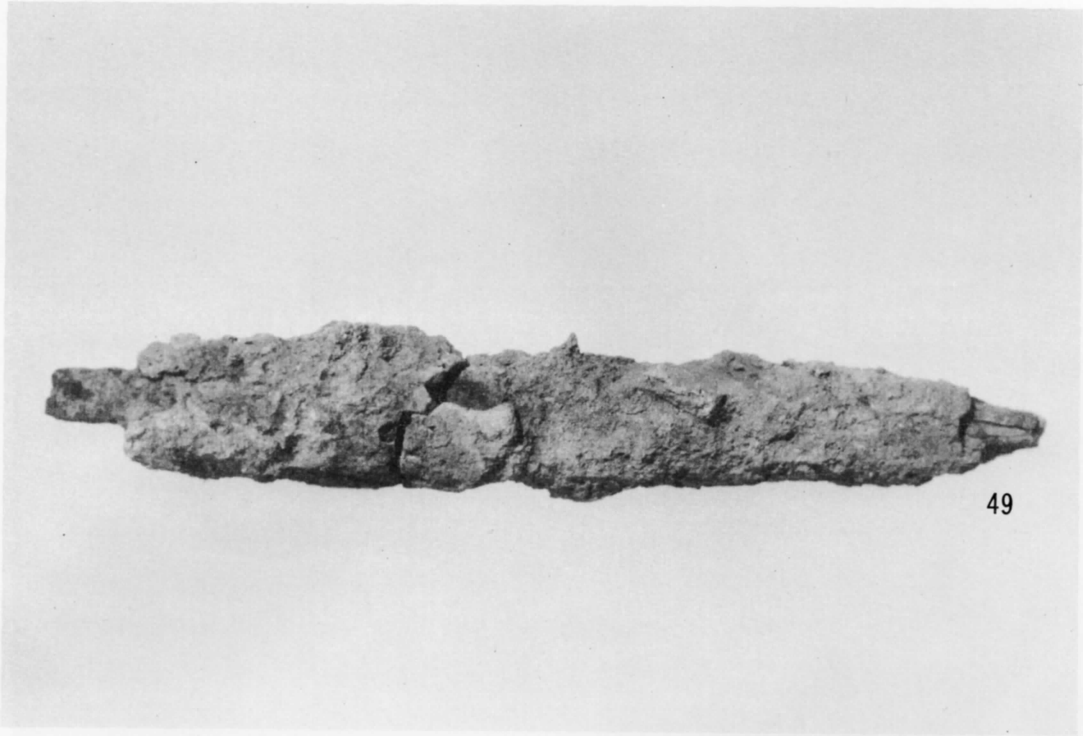




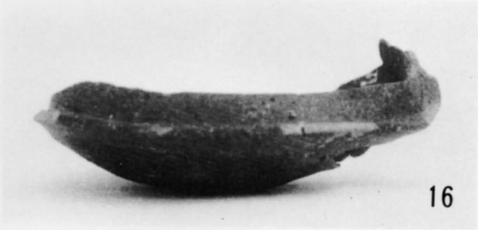
図版14　遺物写真・Ⅳ

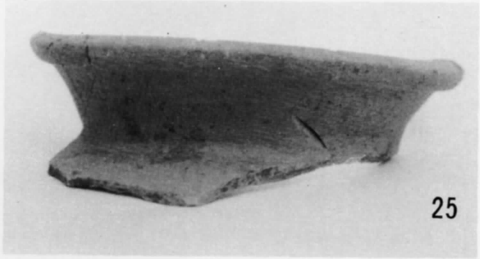


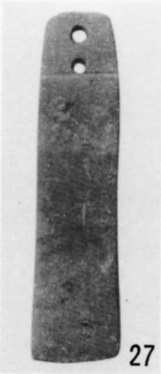



49

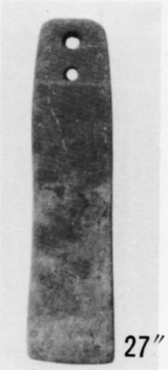
20


16

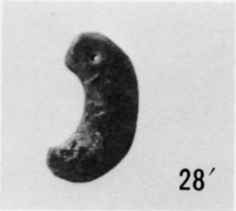

25


27

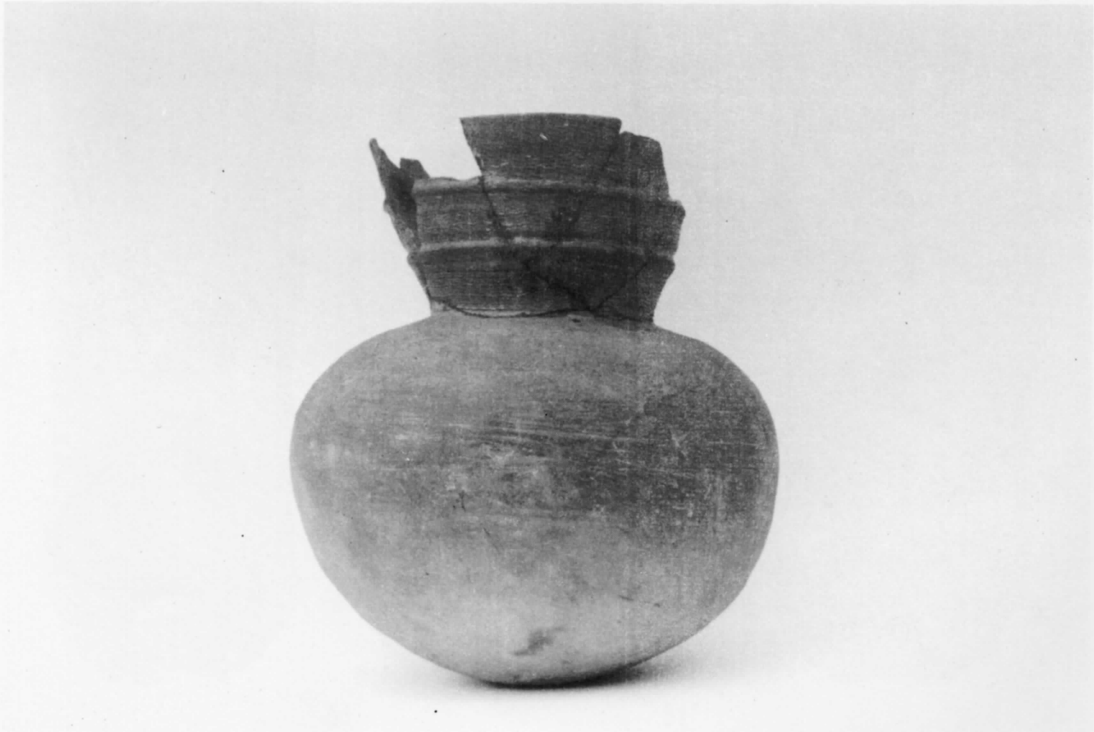
27′

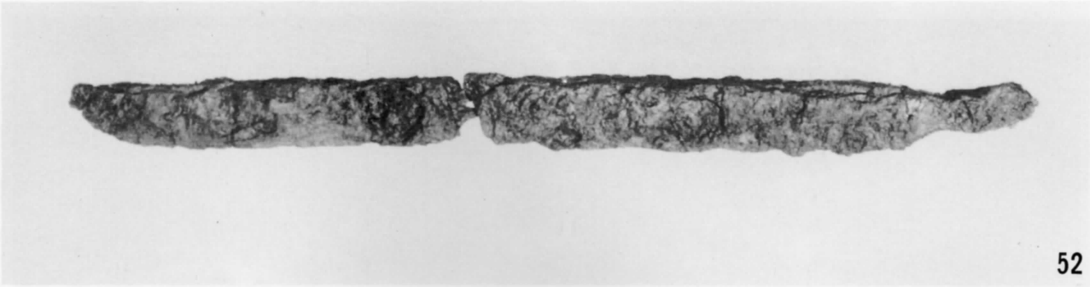

27″

28

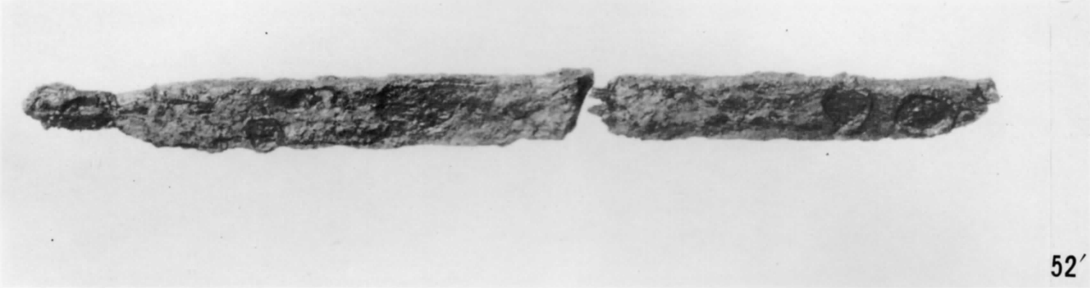

28′

図版16　清滝共同墓地全景及び遺物写真・Ⅵ

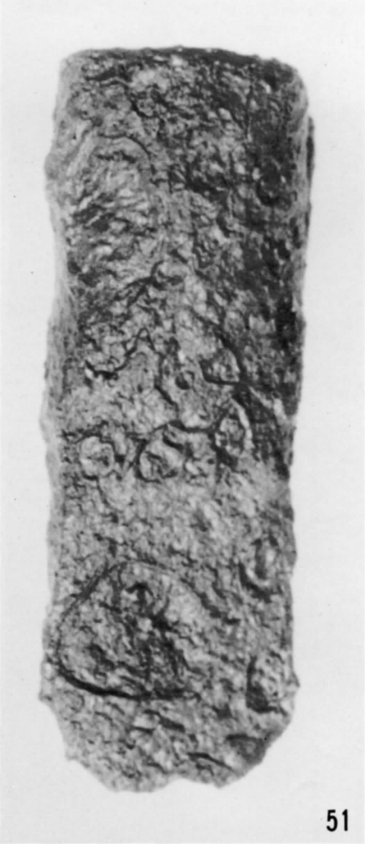




52



52′



51

51′

52″

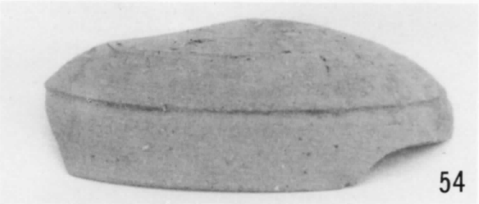
図版18　中野遺跡近景

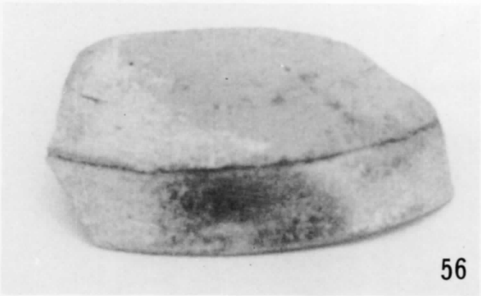
図版19　中野遺跡第1トレンチ・第2トレンチ調査

図版20　中野遺跡調査地スナップ及び第2トレンチ断面

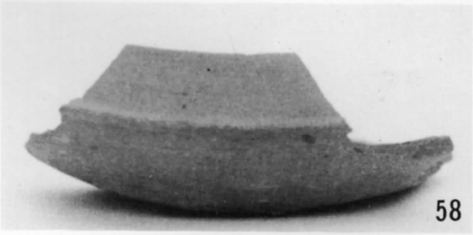
図版21　中野遺跡第1トレンチ断面及び遺物写真・I

53

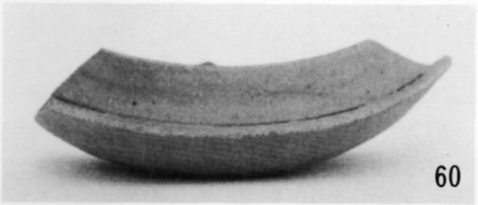

54


56

57


58

59


60

64

岡山南・中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

昭和59年3月　発行

編集
発行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1－1

印刷　田中耕株式会社